

---

# ソードアートオンライン くのいち忍法伝

MITUKAN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソードアートオンライン くのいち忍法伝

### 【Nコード】

N1449BA

### 【作者名】

MITUKAN

### 【あらすじ】

ソードアートオンライン、この世界に テストから参加していたカスミは  
デスゲームと化した今もくのいちとしてプレイしていた。  
だが、彼女の知らぬところで、事態は大きく変容を遂げようとしていた。

ソードアートオンラインの2次作品です。原作キャラはでません。  
設定は文庫版準拠に作者の脳内設定で補充しています。

一章ではほとんど戦闘はありません。

以前にも原作キャラを使って書いてみたのですが、設定の祖語のため削除してしまいました。

今回は多少の祖語には目をつむっても書き上げるつもりですので、どうかよろしくお願いいたします。

## ギルドの解散

### ギルド解散

「うーん、ようやくここまでできたか……」

隠しクエストを終え、ようやく一般フィールドに戻ってこれた私は大きく伸びをした。

「あんなけ準備したのに、丸々一晩かかるとか、無茶苦茶だわ」

クエストを開始したのは、昼すぎだったのに、まさか、朝日を拝むことになるなんて……

「まあ、これで念願の体術スキルも手に入れた訳だし、これからガンレベル上げて攻略組に追いつかなきゃ。」

うーん、ちょっとソロが長すぎたのか、独り言が多くなっちゃたな……

気をつけないと変に思われるかも……

とりあえず、ここ最近クエストクリアのために連絡を絶っていたギルメンに報告と現状確認をしなくっちゃ。

「ダンジョンに籠る前は、確か25層の迷宮区はほぼ攻略も済んだんだよね……」

あっ、また口に出っちゃった。

反省しながらメニュー画面を呼び出す。

うわっ、ギルメンからのメールがメチャクチャ貯まってるよ……

「あらっ、ギルマスからもメールがきてる……珍しいわね」

貯まったメールの中に重要を表す点滅を繰り返すメールがあった。

差出人は私が所属するギルド 風魔忍軍 のマスター『コタロー』  
からだった。

なにかあったのかな？と最新のメールを置いといて確認して……

「はえ!？」

あっ、変な声が出ちゃった。

\* \* \*

私がこのゲーム、ソードアートオンライン（以下SAO）に閉じ込められてから半年が過ぎていた。

私のキャラクター名は『カスミ』、  
現実では高校2年生だが、このSAOでは千人のテストに当選した先行組のひとりとして高レベル組に名を連ねている。

私が 時代から所属していたギルド 風魔忍軍 はこのSAO世界で忍者型プレイを目指す一群だった。

SAOには戦闘職という概念がなく、選んだ武器に対して、既存のMMOにあてはまるタイプでプレイヤーが勝手に分別しているだけ。

だから専用装備なんてのも存在しないので、規定の装備を組み合わせてそれらしくする、いわゆる「なんちゃって」装備なんだけど……

時代にはAGI（敏捷）を高め、フィールドを縦横無尽に駆け回ったもんだ。

まあ、火力不足の所為でタゲりすぎたMOBを他プレイヤーになすりつけたりしたもんだから結構評判悪いんだけど……

しかし、本サービス開始後まもなくなされたデスゲームの宣告が事態をおおきく変容させた。

私達のギルドは当初、三十人ほどいたんだけど、デスゲーム判明後、脱退者が半数に及んじやった。

理由はいろいろあったけど、ぶっちゃけ「デスゲームでロープレなんてしている場合じゃない」の一言につきる。

そんななか私は、「ともかくレベルをあげなきゃ」とすぐにフィールドへと駆け出した。

私がこんなに強気に出れたのは、やはり 時代の経験によるとこ

るが大きい。

レベル制を採用しているSAOでは、低レベルのMOB相手だと文字通り無双ができる。

まあそれ自体はみなわかってはいるだろうが、やはり実際に経験しているのといないのでは覚悟が変わる。

そして私がスタイルを変えなかったのは、選択していた武器 短剣 はAGI重視で手数を稼ぐことにより攻撃力を補えるから。(「逃げる」という手段を捨てがたかったのもあるんだけど……)

その後、時代によくいっしょに行動した男女ペアが追いついてきて、三人でレベル上げにいそしんだ。

ギルド 風魔忍軍 では、上階につづく各層の迷宮区でのボス戦以外は各自が自由行動をした。

時代、私はもっぱらこのハヤブサとツバメというキャラ名の二人と行動していた。

(二人はMMOのオフ会で知り合って、付き合ってるんだって。ちっ、リア充め)

正直、ギルメンでも名前だけ知っているって人のほうが多かったりするんだけどね。

そんな目的意識の低いギルドなんだけど、時代に未達成だったクエストの成就だけは本サービスでは、とみんながいきこんでいた。

それはエクストラスキルのひとつ 体術スキル 獲得クエスト。

終了間際の第7層で仕入れた情報により、そのクエストが第2層にあることだけは掴んでただけど、クエスト発動条件などは一切わからないまま本サービスを迎えちゃった。

開始一か月後に解放された第2層をしらみつぶしに探したけど、結局、第7層解放まで見つけれなかった。

だけど、第7層で必死の聞き込みによりついにクエストへの隠し通路の存在を確認。

即、数名がクエストに挑んだ。

私達三人からもハヤブサが挑戦した（私はスロットの空きがないので今はパス、ツバメは「MOBを殴るなんて無理！」と最初から取る気無し）。

そのハヤブサが戻ってきたのは三日後だった。なんでもSTRの要求値がかなり高ったようで、

「カスミも挑戦するなら、武器を変えてでもSTRを伸ばしたほうがいい。」とのこと。

（詳しい内容は「行ってからの楽しみ、っていうかできれば同じように苦労してほしい」と苦笑された。ふんっ）

現在Lv20の私は（第10層までに出るMOBはLv10までで、レベル差が10離れると経験値が入らないのでLvは20までしか上がらない。）Lv30まで保留とし、Lv25からダンジョンに行き、両手剣で集中的にレベル上げをしてから挑戦することにした。

そして2週間前にLv25に達した私は、二人と別れ、低層に移

動。

始めの一週間は両手剣のスキルに慣れることに費やし、その後一週間ダンジョンに籠り続けた。

そして昨日の朝、ようやくLv30に到達した私は、そのまま第2層に降り、街で昼食を取ってからクエストに挑戦した。

クエストの内容は「素手で大岩を砕く」といったとんでもない内容だった。

そしてその大岩は、

「この鍛え上げたSTRを見よ！」とばかりに振り下ろした私のこぶしをあっさり跳ね返した。

そのあとクエ管理のNPCのじいさんに顔に落書きされ、クエスト終了までリタイアできないと告げられる。

そして日も暮れ、夜も過ぎる頃には半泣きで岩を叩き続ける私の姿があった。

やがて空が明けかかってきた時、ようやく歓喜の瞬間が訪れた。

すると「じいさん、起きてたの？」と言いたくなるようなタイミングで現れたNPCは（NPCなんだから当たり前っちゃん当たり前）、あっさりとスキルを渡すと、

「精進せいよ」との一言を最後に小屋に戻って行った。

帰る前にその小屋でちょっと寝かせてと頼みたかったのに……

仕方が無いので、フラフラする頭をこらえながら帰路についた。  
(転移用の結晶石は使えなかった)

\*

\*

\*

ようやくフィールドに戻った私の目は今、開かれたメニュー画面で  
点滅する一文に釘付けとなっている。

『ギルド 風魔忍軍 は解散する。以後は各自おのおのの責任を持  
って活動すること。コタロー』

## ギルドの解散（後書き）

文庫版準拠とうたっていないながら、さっそく破っています…orz

ギルド風魔忍軍と体術スキルに関しては、川原礫先生ご本人のHP、WordGear内の

『続・星なき夜のARIA』から拝借いたしました。（2012/01/03現在 閲覧可能）

これ以降、Webや公式同人誌の設定と喰い違ってくるかもしれませんが、  
せんが、作者は未読なのでご了承ください。

ただ、感想などでお教えいただき、手直して反映できるのであれば  
させていきたいです。

また、無理な場合もその旨ご報告させていただきますので、ご意見  
おまちしております。

## 再会

再会

「ちょっと、どうゆうことよー!」

会ってそうそう、あいさつもそこそこにハヤブサとツバメを問いただした私。

あれからツバメにメールすると、「すぐ行くから第2層の主街区で待ってて」との返信。

ああ、待ってるって寝ちやいそう……

だが、そんな眠気も二人の姿を見ると、一気に吹っ飛んだ。

「まあまあ、ちょおと落ち着いてよ。これから説明するから。」

宥めてくるツバメの装備は、皮装備で部分保護したいいわゆるシーフ型と呼ばれるもの。

「こつちもカスミに連絡とれなくてやきもきしてたんだぞ。」

と、軽金属の胸当てをした、剣闘士風のハヤブサ。

二人とも忍者らしさのかけらもなかった……

「ともかく、どこかNPCの店に入ろう。いくらプレイヤーが少な

いといつても立ち話ですむ話じゃない……」

ハヤブサの提案に、眠気でごまかされていた私の空腹センサーが活動した。

そういえば、昨日の昼からなんにも食べてなかったわ……

\*

\*

\*

「つまりは、第25層のボス攻略が原因なのよ。」

手近のNPCレストランにはいるやいなや、サンドイッチにスープを頼んでから質問し出したんだけど、料理がくると食べるほうに夢中になっちゃった。

スープをスプーンですくいながら左手でサンドイッチを探る私にあきれながら、ツバメが話をつづけた。

「あにいぐわ、あつあの？」（なにがあったの？）

食べながらも先を促す私に、

「食べながらしゃべるな。とりあえず黙って聞いとけ。」

ハヤブサがたしなめてくる。くぅ〜ツバメには尻にしかれてるくせに、えらそうだ……

「そもそもはギルマスを筆頭にギルドのメンバー数人が、ここ何層か軍に強力していたってことからなのよ。」

「ボス戦以外にも迷宮区の斥候やレベル稼ぎスポットの陣取りなどかなり深くかかわってたようなんだ。」

「まあ、その辺までは上手くいったみたいなんだけど……」

「25層のボスがとんでもなかったんだ」

「私達はほらっ、あんまりボス戦に参加しなかったじゃない。だから他と比べてっていわれてもピンとこないんだけど、サイズも攻撃力もけた違いだったんだって。」

「で、軍から大勢の死者が出るっていう最悪の結果になったんだが、その時に……」

「うちのギルドからも死者が出ちゃったんだよね。」

「それって、私も知ってる人……?」

「うっん、まず会ったことないと思う。私らも知らない名前だったし、にはいなかった人だって。」

「ああ、コジロー達から聞いたから間違いないだろう。」

「あつ、あの二人は無事だったんだ。」

彼らは 時代からのギルメンで、語尾に「ござる」とつけるので

よく覚えてた。

「あの二人は 聖竜連合 に加担していて、25層のボス戦にも参加していたんだって。」

「で、死人を出したんで、解散ってこと？」

「表向きはね。」

「なによ、その言い方？ 裏事情があるの？」

「ああ、ボス攻略で軍が大敗したのは、ボスにびびって逃げ出したのがいたんだ。」

「それがきっかけでパニックが起こり、戦線が大混乱に陥ったからなんだが……」

「その最初に逃げたのがうちのギルマスだって話。」

「そこで怒った軍幹部が姿をくらませたギルマスに賞金をかけたってもっぱらの噂だ。」

「まあ、そのへんは噂の域をでないんだけど、うちのギルドのせいだ！ って声がおおきいのは事実。」

「だからギルメンだってすぐにわかる格好をしていると、パーティーに入れてもらえないどころの話じゃない。」

「プレイヤーショップじゃ買い物できないし、最悪PKされるかも……」

それで二人はその格好なのか……

「だから他のプレイヤーの目につかないようにここで待ち合わせたんだ……」

「うん、そう。カスミちゃんも上に行く前にNPCショップで適当に服かって着替えなきゃ。」

「上って、結局25層でとまってるの？」

「いや、25層はそのまま 血盟騎士団 や 聖竜連合 らの活躍でクリアされた。」

四日前には軍抜きで26層も攻略され、今は27層だ。」

「軍抜きで？ いまのギルドの人達ってそんなにレベル高いの？」

「ええ。もう40超えてる人もいるって。それに軍でいっても所帯が増えすぎてコル稼ぎの方がメインで、レベル的にはトップとちよつと差が開いてたんだって。」

「トップギルドの連中はもうフィールドじゃ経験値が入らないからって、ガンガン攻略をすすめている。」

30層到達まで二週間かからないんじゃないかとまで言われてるな。」

「ふえええ、どんだけえ〜」

なんか二週間離れただけで、浦島太郎になった気分だわ……

\* \* \*

食事が済むと、眠気が強烈に戻ってきたので、話を切り上げ店を出た。

すぐにも宿をとって眠りたかったが、27層に連れて行ってもらわないと街の名を知らない私じゃ

一人では行けないので（今聞いても忘れそうだし…）、服を買って（街着のワンピース。店で着替えた）

27層に移動。宿に直行し、そのままベッドへ。

うとうとしながらも頭をよぎるのは……

さて、これからどうしよう？

ボスの経験値でレベルアップしている攻略組には追いつけそうにもないし……

だからって、死んじゃうかもしれないボス戦なんて怖すぎて無理だよな

ああ、せっかく体術取ったのに使いどころないのかなあ

はあ、あ、いいや、今は寝て、起きてから二人と相談しよう。

## 再会（後書き）

カスミのユバメ達に対する口調がタメ口なのは、  
ツバメが「ゲームで敬語禁止！」と言ってるからです。

12/01/05 料理のメニューを変更しました。

## 話し合い

### 話し合い

夕方、ドアをノックする音で目覚めた。

食事に行くからと、二人が起こしに来てくれたんだ。

二人とも、今は街着に着替えてる。

ツバメはへそ出しTシャツにローライズのショートパンツ。

ハヤブサは青の開襟シャツに白のスラックス。

どちらもプレイヤーメイドの品とのことで、ちょっとしたおしゃれさんってかんじ。

生産職の人らも結構レベル上げてるんだな

私は2層で買ったやぼったいワンピース（水色）を見て、

なんか、「とほほ……」な気分だった。

\*

\*

\*

「で、二人はいまどういふふうに動いているの？」

NPCレストランにたどり着くまではここ27層の説明を聞いてただけど、

店につき、注文も終えて、いま一番気がかりなことを訪ねた。

「それなんだが、俺達はいま生産職をあげているんだ。」

「うん、私が裁縫、ハヤブーは鍛冶。」

うわっ、そっちは考えてなかったわ……

あっ、ハヤブーっていうのは、「ハヤブサって呼びにくい！」のでツバメがつけたあざな。

当然ハヤブサは嫌がったんだけど、「ならハヤトって呼ぶよ？」

あれ？なんか急にまともじゃない？

が、「実名で呼ぶな！素に戻って恥ずかしい！！」と、どなるハヤブサ。

つまり隼人が本名でそこからつけられたのがハヤブサ（隼）ってことなんだって。閑話休題。

「レベルなら生産でも上がるからな。まあ、素材狩りに行くこともあるけど、そんな時経験値に気を使わなくてもいいから低層区で安全に行けるし。」

「私達もそれぞれの生産ギルドに入っつて、狩り行く時もそこで大規模パーティー組んでいくんだ。いわば素材ツアーみたいな感じ。裁縫なら部屋でもスキルレベルあげれるから夜も退屈しないよ。」

生産かあ……、どうにもイメージがわからないんだよねえ、これが。メジャーな生産職で考えてみても……

鍛冶師：そりゃ私もゲーマーだから有名どころは知ってるけど、SAOにはまさに星の数ほどの数と種類の武器が存在する。かなりの武器オタでなければ注文に応じきれないんじゃないかな。

裁縫師：これは技術じゃなく、イメージが大事らしく、どちらかといえばデザイナーらしい。  
が、<sup>リアル</sup>現実でファッション雑誌なんて見たこともない私じゃ無理っぽい。

細工師：これもデザイナー系。アクセサリーなんだけどこっちも興味なかったし。

料理師：調理自体は自動で、腕をこらすのはスパイス素材の組み合わせだつて。

外食といえばファミレスな女子高生にそんな味がわかるわけない。

とまあ、こんな感じでダメダメな私。

あつ、SAOには回復薬なんかをつくる錬金術は存在しない。

低レベルの回復薬でも需要が高すぎて、プレイヤーが安易にはし

ってしまうのを防ぐためだっ

あと店売りよりも高レベルの薬なんかが出回ると、バランスが崩れるからってのも理由じゃないかって言われてる。

「しっかし、ツバメはとまあハヤブサは鍛冶なんて大丈夫？武器の種類ってハンパないよ？」

と自分じゃ無理っぽい問題をどうクリアするのか気になって尋ねてみた。

「ああ、それなら大丈夫。俺は刀専門を目指すから。」

「刀ってエクストラスキルじゃないかって言われてる日本刀？もう出てるの？」

「だいぶ前からもう結構でてるぞ。あれは片手曲剣を使ってる

と出るらしい。

25層解放以降はNPCショップにも並び出したし。」

「でも、それなら先行している鍛冶師の誰かがもう作ってるんじゃないか？……」

「それがそうでもないんだ。すでにそこそこレベルをあげた鍛冶師のメニューに刀は出てこないんだ。」

「それって……」

「そう、鍛冶師でも刀鍛冶はエクストラスキルじゃないか？って言われている。」

普通、鍛冶師が使う武器はメイスとかの打撃系だろ。そこで斬撃系っていうか刀スキルを発現させたプレイヤーが鍛冶すればできるんじゃないかって。っていうか逆だな。刀スキルを持つている俺が鍛冶ギルドに入ったからひよっとしたらってことになったんだ。」

「えっ、じゃあハヤブサは刀スキル発現しているの？」

「ああ、俺は ん時から曲剣使ってたからな。」

「他にも鍛冶って結構分業されててな。最初に基本武器をマスターするんだけど、それだけだと個性が出ないだろう。だから一種類に特化するとかいろいろ試行されているんだ。それと鍛冶師自身のステータスも影響するかもってことであえてAGIに振ったりしているな。だからAGI極だった俺は重宝されている。他にも強化を専門に育てるっていうのもいるしで、いろいろつぶしがきくんだな、これが。」

へえ〜いろいろあるんだ、っていうか結構深く考えてたんだ……

「だからさあ、カスミちゃんも危ないことやめて生産職始めない？ イメージっていても基本メニューにあるのをアレンジするだけだし。細工師なんかレベルあげてできるのはボーナス付加だけって話だから、既存品でも売れるかも。」

あっ、それなら私でもできるかも。

でもせっかく体術とっただし、いままで育てきたスキルもおしいなあ……

「ちよっとすぐには決められないかなあ。もう少し考えさせて。」

「まあ、カスミにはなにもかも急な話だからな。ゆっくり考えればいい。俺達ならいつでも相談に乗るし。」

「うん、すぐには無理よね。でもカスミちゃん、絶対ソロでフィールドに出たらダメよ。軍の弱体化でオレンジになる奴が増えてるらしいの。」

「後、前のギルドのことも他言禁止だ。わざわざ敵視される必要はないからな。短剣使いがAGI伸ばしてるのは当然だから格好さえ普通にしていたら問題ない。」

ああ、ほんとに心配してくれてるんだ……

二人の真摯な態度に感銘を受けたが、その一方でその真摯さこそがこの世界はデスゲームなんだという事実をあらためて認識させた。

## 話し合い（後書き）

生産職の内容は完全に脳内設定です。

特に鍛冶はちゃんとした設定がありそうで、怖いです。

もし、情報があれば、お教えください。

12/01/05 みみみ様のご意見を参考に鍛冶師の話を改訂

## あらたな再会

あらたな再会

食事をすませ、街の案内は明日にすることで、宿に戻った。

いまは、ひとりで部屋のベッドに寝転がっている。

「あらためて、じゃない。ようやく認識したんだ……」

デスゲームという事実を。

ここにいる私は現実リアルの私じゃない。レベルを上げれば超人になれる。

そんな私が死ぬわけない。とたかをくくっていたんだ。

そんな私につきつけられた現実、それは私が知っているアインクラッドはたかだか6層。

それは100層の内、たった6%でしかないということだ。しかもその6%は初心者用の低設定。

この先どんな罠が待ち受けているか予想もつかない。実際25層では想定外のボスで多数の死者が出た。

同じことがサブ迷宮やフィールドで起こらないなんて保障はまったくない。

そう考えると、生産職でレベルをあげるといのはとてもまっとうなことだと思う。

ツバメの話聞いてみると、自分にもできそうだ。さらに言えば、店を出して成功する必要もない。

レベルさえ上がれば、素材を売るだけでもここでの生活費を稼ぐには充分。

店を開くっていうのはモチベーションを保つための目標っていうのがほとんどじゃないかな？

もちろん拘りを持って生産職をしているプレイヤーも大勢いるだろう。

でも、そういう人は始めから生産職を選んではたはず。

最近始めた、にわか生産職はそんなもんじゃないかなって思うんだ。

それを非難する気は毛頭ないし、私が心惹かれているのも確かだ。

ただ、それでいいじゃんと揺れる気持ちの中に、それはダメっていう気持ちも存在する。

なにがダメ？と聞かれても答えられないんだけど、なんかモヤモヤしているんだ。

「え〜い、きりがない。散歩にでも行こっ！」

堂々巡りをする思考から抜け出すため、街に出ることにした。

\*

\*

\*

いま生産職はどんなものを作っているのかと、露店をしてみることにした。

最前戦の街は攻略組が持ち込むいい素材が手に入るので、生産職は街が解放されると、即移動する。

そして、いい素材で作られた高ランクの装備を求めてまた人が集まるので、最前戦の露店は結構遅くまで開いている。

武器の露店を見つけたので覗いてみる。

そついや短剣も換え時かな、

せつかくSTR上げたんだからちよつと重くても攻撃力が高いのがいいかな……

並んでいる武器はさすが最前線だけあって高レベルなものばかりだった。

ただ品揃えはオーソゾクな武器のみで、スタッフ（両手棍）やスピア（短槍）といったマイナーな物は無かった。

「短剣もなしか……」

やはり攻略に挑むようなプレイヤーは奇をてらわないってことなのかな。

自分の武器が主流でないことに軽く落ち込んでいると、

「カスミさん」

プレイヤー名で呼びかけられた。

名前を知ってるってことは知り合い？誰だろう……

「はい？」

「え〜と、おひさしぶり？いや、この姿でははじめましての方がいいっすか？」

「はじめましておひさしぶりであります。」

そこには見慣れぬ男性プレイヤー二人がいた。二人ともSAOではめずらしい黒のスーツ姿。

あれ？ こんな口調、聞き覚えがないんだけど……

「え〜と、どちらさま？」うん、素直に聞こつ。

「ははっ、この姿じゃわからないっすね。SNAKEっす。」

「自分はOWLであります。」

え〜、スネークにオウルっ？あの渋顔やせマッチョの〜？

口調もハードボイルド風だったのに……

目の前にいるのは自分と同じ年くらいの男の子。

スネークはぽっちゃりというよりまんまるっていうのがしっくりくるおデブちゃん。

オウルは逆にひよろっていかガリガリ？

「以来ですから半年ぶりっすか？カスミさんはアバターとほとんど変わらないようであらやましいっす。」

「なんか顔もアバターに似ている気がします。」

そう、二人とは 時代にハヤブサ、ツバメコンビの次によく遊んだギルメンだった。ん？二人？

「あれ、いつももう一人いっしょにいたよね。あの無口なFOXさん。」

「ああ、フォックスの姉御でしたら、いま露店めぐりしてるっす。」

「です。姉御はどこに行って、いつ帰ってくるかわからないので別行動であります。」

あっ、なるほど…って姉御？

「えっ、ちょっと待って、姉御って女性ってこと？あのフォックスさんが？」

あの人のアバターってダンディなおじさまキャラだったよね。

「そうなんっすよ。自分らもかなりキャラメイクに凝ったんっすけど、姉御は上をいってました。」

「自分らもびっくりであります。」

私もびっくりだよ。そっか、口調とか人口音声でわかるから無口だったんだ……

「でも、ほんとひさしぶり。私はすぐ はじまりの街 を離れたからなんだけど、三人の話はいままで聞かなかったんだよね。」

「まあ、 ん時のフレンドリストは消えてたっすからね。」

「自分らもカスミさんを探していたのでありますが、見つける前にあの宣告がきたのであります。」

「ふん、それでどうし……」

「こらっ！あんたらなに女の子ナンパしてんの！！ 身の程を知りなさい！！」

後ろから女性の声がかぶさった。

「い、いや違うんっすよ姉<sup>あね</sup>さん、」

「そ、そうであります、こ、こちらはカスミさんであります。」

「え、カスミ？あら、ほんと。うわあ、あんたはあんまり変わってないね。」

ってことは、こちらがフォックスさん？

このシルバールブロンドさらさらストレートの？

ちよつときついめの美人さんが？

私よりもふくよかな胸の谷間をみせつけているこの人が（イラッ）  
？

そんな私の混乱をよそに、

「いや、すっごいひさしぶりい。ねえねえ、時間ある？どっかでお茶しないかい？」

ひとり盛り上がるフォックスさん。

「え、ええ、いいですよ、喜んで。」

混乱しながらもイエスの返事をした。

「じゃあ、いきましよう。あっ、それとあたい達にさんづけはやめてね。」

キヤラ名にさんづけつけてきらいなんだよ。」

聞きたいこともあるし……、でも聞けるかな？

## あらたな再会（後書き）

ご意見、ご感想おまちしております

## 決意

決意

「はあく、やっぱりカスミも同世代みたいね。私らは高2だったけど、カスミは？」

「あつ、私も高2。」

フォックスが「やっぱり」という根拠は 時のログイン時間のこと。

9月に始まった テストでは平日の昼間はほとんど人がいなかった。

帰宅部だった私は早い時では3時すぎにはログインしていたんだけど、前後してログインしてくるのがこの3人組だった。(ハヤブサとツバメは大学生だったので、平日でも朝からインしたりしていた。)

あの時は自動切断がついてたんだよね……

の時は長時間使用による弊害を考慮するってことで一日の稼働時間が8時間を超えると自動切断され、30分間は再接続できないように設定されてただけ……

「でも、ほんとカスミはアバターと変わらないね。私もそうしとけばよかったな。」

カスミのキャラは割と自分似のモデルを選んでいたからね。(胸を少しアップしてたのはナイショ)

「それじゃあ、あの時はたいへんだったんじゃない？」

あの時っていうのはアバターが光につつまれ現実リアルの似姿へと変貌した時のことだ。

「そりゃあもう、たいへんなんてもんじゃないわよ。いきなり目の前のイケメンが縮むは薄ぺらっくなるわでもうパニックよ。」

「姉あねさんこそひどかったすよ。」

「姉あねさんは今の顔に角刈りだったであります。」

そういえば髪型は変わらなかったわ…

「こらっ、嫌なことまで思いださすんじゃないよ。まあ男性専用装備が女性専用装備に代わってくれてただけは助かったけどね。じやなきゃ、下着姿までさらすことになったかも…」

ブルツと身を震わせるフォックス。

「まあ、さすがにいたたまれなくてね、ダッシュで宿に戻っちゃまったよ。」

「自分も同じっす。この姿で続けたら笑い物になるって考えたら…」

「自分はこの姿が強くなるって信じられなかったっであります。」  
うう、なんて言ったらいいんだろう？ そんなことないよ、なん  
て簡単にいっちゃダメだよね……

「それでギルドもすぐ脱退して引き籠もってただけど、一週間も  
したら開き直っちゃまったよ。」

「姉さんが言ってくれたんっす。『いまを逃したら二度とこのSA  
Oで遊べなくなるんだぞ！』って。」

「それで自分らはハツと気付いたんであります。」

「犯罪が行われたゲームは間違いなく封鎖されるってことさね。な  
らもつたいないじゃない？

「こんなすごいゲームが二度と遊べないんだから。」

「さらに後続のゲームすらでるかどうかが危ないっすから。」

「自分はもう一度ナーブギアを使う勇氣はないと思っております。」

ああ、やっと納得できた。

『もつたいない』それが安全策を受け入れ難くしていた理由なん  
だ。

私はもつとこの世界を楽しみたいんだ。無茶かもしれないけど、  
ちよつとは冒険もしたいんだ。

自分ひとりで納得していると、



「ちつ、現実リアルでも美男美女なんてリア充めつ。」

いや、フォックスだってすごい美人だから…

\*

\*

\*

二人が立ち去った後、今度は私の話をした。

「へえ、あのクエ受けたんだ。そんなに固かったのかい？その岩。」

「固いなんてもんじゃないわよ、まるで凶器、いや狂った器で狂器  
つてほうがしっくりくるね。」

「ハハハ、それで使い勝手はどう？」

「それがまだ試してないんだ。今朝クエから戻ったばかりだし。」

「なら、練習に行く時は声かけてよ。ぜひ見たいわ。悲願の体術ス  
キルだもんね。」

「うん、そんな時はぜひお願いするわ。」

その後もたわいない話をしながらも、私は気になることを聞き出  
すタイミングをはかっていた。

「とりあえず装備は整えないとだし、街服も欲しいな。これ間に合わせだから。」

よし、さりげなくネタフリできたぞ。

「それにしてもフォックスは凄い格好しているね。」

フォックスは黒のボンテージ風のコルセットなのかな？それが胸まであるような下着のような上着に

ゴスロリ風のミニスカートと凄く扇情的な格好をしていた。

プラチナブロンドの髪ともあいまって、くやしいけど（主に胸が）すっごく似合っている。

「ああ、これ？半分は開き直りんだけど、あの二人といっしょに露店覗いてたらすっごい勢いで薦められたのよ。」

うん？二人も関係するの？

「なんでもヤセとデブをひきいる美人は扇情的な格好をするのがデフォだっていうのよ。」

ああ、確かになんかそんな絵を見たことあったな……なんのゲムだったけ？

「で、二人にもいまのスーツを薦めてきてね。あまりの勢いに押されてつい買っちゃたんだよ。」

うっし、ファーストミッション、クリア！といってもこれはジャブ。

これから繰り出す右ストレートが決まるか!?

「あともうひとつ聞きたい事があるんだけど……」

うう、声がちいさくなっていく……、頑張れ自分!

「なに?」

「の時のことなんだけど……」

あつ、いまフォックスの肩がビクンとなった、くつ、いけるか!?

「あの、アレ、確認した?」

よしっ、言い切った、よくやった自分。

ガバツと立ち上がり顔を真っ赤にするフォックス（SAOは感情表現がオーバーだからホントに真っ赤）

「バ、バ、あ、あん……」 言葉にならないフォックス。

「え、えくと、どう?」

上目づかいでさらに尋ねる。ここはひいちゃダメだ。ああ、でもいま私の顔も絶対真っ赤だ。

「……見てない……」

観念したのか、椅子に座りなおすと、うつむきながら小声で答えてくれた。

「え、どうしてえ？」 いや、どうしてもなにもないんだろっけど…

「…… の時は下着が脱げなかったの。だから……」

律儀に答えてくれた。エエ子や。

「あるにはあったの？」 なんか遠慮がなくなってきたなあ…

「うん、上からさわったらなんかついてた……」

うわっ、言ってるって恥ずかしくなったのか、真っ赤を通り越して顔が赤く発光しているよ

うう、調子に乗りすぎた、この空気どうしよっ？

右ストレートにカウンターをくらっちゃったよ

## 決意（後書き）

今回、時のログインにふれていますが、SAOの時間は現実とリンクしているみたいなんですなえ。

それだと、普段インした時って夜ばかりってことになるんだけど…

ALOはゲーム時間の一日を16時間にしてると明記されてるんですが…

一応脳内設定として「SAO時間は現実の6時間遅れ」ってのを考えたんですけど

こじつけっぽいので書くのをやめました。

## 新しい武器

### 新しい武器

翌朝、ハヤブサとツバメとの三人で宿の朝食を取りながら、私が決めたことを二人に話した。

「じゃあ、攻略中心でいくのね。」

「うん、って言ってもボス攻略は無理だし、ミニダンジョンやイベントクエなんかをクリアしていきたくないあつて。」

「どこかのギルドにはいるのか？」

「うん、その気はないかな。縛られたくないし、用心棒的な形でパーティーに参加できればってかんじ？」

「といつても、攻略組以外はそんなレベル差ないでしょ。わざわざ他人を入れるかどうか……」

「その辺は生産スキルで補おうかなあつて。だからツバメ、裁縫スキルの上げ方教えてね。」

後は、攻撃スキルを上げていくのも考えてる。」

「じゃあ、すぐに探索に乗り出すってわけではないんだな。」

「もちろんだよ！まだ体術スキルを使ったことないし、武器も装備も新調したいしね。」

ハヤブサも体術スキルのコツを教えてね。」

「それはOKだが、俺もあんまり使っていないんだよなあ…っていうか使うような状況になるとやばすぎる。」

「そっなの？そっいや2、3回しか見てないわね。」

「ああ、手が届く距離まで詰められてるっていうのがやばい。ホントすっげえあせるから。」

え、そんなの聞いてないよ。まあ、なんでも試してみないとだけだね。

「じゃあ、今日はどうする？ まあ優先するのは装備かな？」

「だな。防具は軽装だし、この層の素材での製品も結構出回ってるから問題ないだろ。」

だが、武器は頼んで作ってもらわないと無理だろうな。」

うん、昨日見た露店でも無かったしね。

「まあ、そっちも心当たりはあるから大丈夫だ。ただ時間がかかるかもしれないから先にそっちにいこう。」

「うわっ、ありがとう。」 うん、頼りになるな。

\*

\*

\*

というわけで、やってきました鍛冶ギルド。ツバメは「うるさいからいかない」っとお留守番。

鍛冶ギルドにかぎらず生産系のギルドは最新の街で貸し出される作業場を借りてギルメンに場所を提供している。

私の武器を作ってくれそうな鍛冶師さんがここにきていることはハヤブサがフレンドリストで確認済み。

要件もメールしているので早速、お願いにいった。

カンシヨウと名乗った鍛冶師さんは、

「欲しいのは短剣と聞いたが、どんなのを使ってきたんだ？やっぱリダガータイプか？」

話もそこそこに武器について聞いてきた。なんか職人的なオーラがでまくってとっつきにくい。

「あゝこんなのを使ってるんですけど……」

おそろおそろ所持している短剣を差し出す。NPC品だが+8まで強化した愛用の一品だ。

「ほう、ククリか…、なかなかいい趣味しているな」

ニヤリと笑うカンシヨウさん。うう、なんか怖いよ

「で、このサイズで素材違いを作ればいいのか？これならインゴッ

ト1個で余裕でできるか？」

「あの〜、その形状で、できるだけ大きく作ってもらいたいんですけど……」

「ほう、これも刃渡り40cm近くはあるぞ。短剣としては大振りな方だが？」

「そうなんですか？　じゃあ、それ以上は無理なら重さだけでも上げてもらえたら……」

「いや、重さは高ランクの素材を使えば、普通に重くなるんだが……」

なにか考え込むカンショウさん。

「刀があるなら脇差もあるだろうし、大脇差なら長さは……」

ぶつぶつ独り言を言いながら、メニュー画面を開きククリ刀の数値を変更していく。

「よしっ、認証された！喜べ。希望どおりのものができそぞー！」「  
いうやいなや、返事を待たずにインゴットを叩きだす。

「邪魔になるから、できるまで外で待とう。」

\*

\*

\*

5分ほど待っていると、ドアが開いた。

「できたぞ！会心のデキだ！！」

うれしそうな笑顔でカンショウさんが告げた。

作業場に戻った私の前に横たわる一品は、短剣と呼ぶのが戸惑われる巨大な物体だった。

「名前は ディア・ハンター か。まあレア素材ってわけでもないし平凡な名前でも仕方ないか……」

その ディア・ハンター と名付けられた剣はとにかく圧倒的だった。

もちろん、1mを超えるような両手剣に比べたら小さいよ。でも全体的にすつきりとしているそれらに対し、湾曲した刃が醸し出す雰囲気は存在感っていうか禍々しさが半端ない。

「刃渡り60cm。大脇差がだいたい60cmだから60cm以下ならできると踏んだんだが上手くいった。」

こんな大きな片手で持てるのかな？まずは両手で……

「使ったインゴットは通常の片手剣と変わらない。なんたって脇差と違って幅も厚みもあるからな。」

そういえば、片手剣も普通70cmくらいだよな。そんなにかわ

らないじゃん。で、幅も厚みもあるつと。でも逆に片手剣と思えば、振れないこともないのかな。おっ、いけるいける。

「ほう、要求筋力値はかなり高めなんだが、苦にしてなさそうだな。」

うん、だいじょうぶ。両手剣を振り回してたのに比べたら軽い、軽い。

「ハハ、こんな女の子がこんなごつい刀を軽々振り回すんだからな。ゲームとはいえ不思議な感覚だよ。」

「あとは鞘だな。革製の方が軽くて動きやすいだろう。後ろ腰に水平に指すのがいいな。」

いいながら材料を取り出すと、ちゃっちゃと作り上げていった。

「強化の素材はここでは出ないな。まあ集まれば持ってきた。いまでも片手剣に近い攻撃力だ。強化すれば40層代でもいけるかもしれん。」

「それよりも、鉱石がランクアップしたら作り直した方が早いんじゃないか？形状自体は規格品なんだろう？」

「それもそうだ。強化素材集めよりは楽だし確実だな。よしっ、これから2代目、3代目と作ってやるから、ちゃんと俺んとこに来いよ。こんな変なのつくのは俺ぐらいなもんだからな。」

うん、ちゃんとお願いにきます。楽しんだくれたみたいで、こっちまでうれしい。

\*

\*

\*

この後、ひとりで宿に戻ってツバメとおでかけ。ハヤブサは女の  
買い物は疲れるからパスつと作業場に残った。

で、買った装備は赤の革製ノースリーブのワンピースに同色の肘  
上まである小手。武器重量が増えたので、鎖帷子はパス。下は黒字  
に赤い刺繍のはいつたレギンスに黒のロングブーツとなった。腰に  
投擲武器用のフォルダーがついたベルトを巻いて完成。

さらに、街着も買いに行ったんだが、ツバメの着せ替え人形と化  
してしまった。

うう、疲れたよぉ〜

## 新しい武器（後書き）

大脇差は60cmとしていますが、定義として2尺未満がそれにあ  
たると

あるのでそのように設定しました。

実際は1尺9寸などが主流のようで、60cmありません。  
ただククリには刃渡り1mなんてものもあるようです。

体術スキル（前書き）

ついに戦闘です

## 体術スキル

体術スキル

「わあ、ホントにあんたがあのフォックス？ めちゃくちゃ美人じゃない！」

あいさつよりも先にフォックスを確認するやいなやツバメが抱きついた。

「ねえ、こんな美人なのに、なんでおっさんキャラでプレイしてたの？」

「お、おっさん……」

あつ、おっさんって言われてフォックスが落ち込んでいる。力作だったんだろうなあ

「はじめましておひさしぶりっす、ハヤブサさん、ツバメさん。スネークっす。」

「はじめましておひさしぶりであります。自分はオウルであります。」

「なんだか… そのあいさつ定着しちゃったの？ そっぴやスネークとオウルはさんづけを嫌がるくせに  
こちらはさんづけで呼ぶんだよねえ」 まあ私は拘らないけど……

「ああ、ひさしぶり、ハヤブサだ。話はカスミから聞いている。今日はよろしく頼む。」

いま私達が集まっているのは、27層のゲート前。

今日は私の体術スキルの練習と裁縫スキル用の初期素材集めを兼ねて、低層域に出かける。

フォックスも見たいと言っていたので声をかけると、即OK。スネークとオウルもついてくるって。

六人でパーティー組んで、向かったのは第5層。狙いは グレートホーン という鹿型のMob。

第一層からいる鹿型Mobの最上級種。ドロップする皮が軽装用の肩当てや肘当てにいいんだ。

ツバメいわく、この皮ひとつで肘当て2枚と膝当て2枚がつくれる。一枚加工でスキルレベルが1上がる。スキルレベル100まではこれでいけるが、それ以降は別のモノを作らないとダメ、とのこと。

5層程度の敵ならステータスでのゴリ押しも可能だから、安全に体術スキルを試せるんじゃない？

軽く言うツバメの横でハヤブサは青い顔をして黙ってしまった。

\* \* \*

## 第5層 フィールド区

鹿の生息地についた一行。

「じゃあ、まずお手本見せて、ハヤブサ。」

「ふう〜、いくけど、リンクしてくるのの退治はまかせるからな！」  
ため息をついて、とぼとぼと鹿に近づくハヤブサ。

鹿はノンアクティブMobなので、攻撃しない限り真横に立って  
も何もしてこない。

鹿の横に立ったハヤブサは腰を落とし、右の中段突きを繰り返した。  
た。

その攻撃で鹿が半歩分飛ばされる。

攻撃されたことで敵対行動をとろうと鹿が振り向くところに右の  
回し蹴りがクリーンヒット。

力つきる鹿を見て、

「うわ〜、すごいー！」

「やるじゃない、ハヤブサ。」

「ほう〜、たいしたもんだねえ〜」

「やっぱり足技はいいっすね、うん。」

「投げ技や絞め技とかはないでありますか？」

五人の称讃に気を良くしたハヤブサだったが、周りの鹿が一斉に向かってくるのを見て青ざめる。

「お、おいつ、しゃべってないで手伝って!!」

応援要請をしながら、間近にせまった鹿に回し蹴り。だが、鹿の突進の方が早く、足が当たる前に吹っ飛ばされる。

「ワハハハハハハッ」

「ツバメ、笑ってないで、助ける!!」

鹿は一頭が攻撃されると周辺の鹿も敵対行動をとる。こういった行動はリンクMobって言われている。

残り一頭にしてから練習するほうがいいよね……

そう考えた私は腰からディアハンター（鹿狩り）を引き抜く。

試し切りが鹿なんてしゃれてるじゃない。

先程ハヤブサを吹き飛ばした鹿が私に気付き、突進してくる。

斜め上に飛びあがり突進をかわすと、鹿の胴にディアハンター

を振り下ろす。

「はえ？」

鹿は前後に分かたれ、2か所でポリゴン片の爆散を起こす。

鹿を一刀両断って…… これって短剣の攻撃範囲じゃないね…

周囲を見渡すと、皆それぞれの武器を手に鹿をさばいている。

スネークが手にしているのは青竜刀かな。防具も中国の武狭みた  
い。

彼も私と同じく 軽業 をスロットに入れているので飛んだり跳  
ねたり目まぐるしい。

オウルはAGI極をやめたようで、両手剣を構えている。  
装備も金属製のライトアーマー。 武器防御 も使って、いなし  
ながらの攻撃。

フォックスもパワーファイターに転身したようだ。

今構えてるのはランス。相手によってはメイスと斧も使っているら  
しい。 本人いわく、

「目指せハルバード!!」 だそうだ。

「突進対決〜!!」

と叫びながら、フルプレート装備で鹿の突進を正面から突き崩し  
ている。 ようやるわ…

笑いを納めたツバメも突進をひらひらかわしながら、スピア（短槍）で突きまくっている。

「AGIは上げたいけどMobに近づくのはイヤッ！」なツバメが選んだのがスピア。

彼女の装備はといえば、布製の白い半袖シャツにはえりとリボンがついていて、下はこれも布製のチェックのミニ。ショートブーツに膝下のすね当てとまるでなんちゃって女子高生だ。

吹っ飛ばしから立ち直ったハヤブサも日本刀を抜いて鹿に向かっていく。

突進する鹿に上段からの振り下ろし。あっ、またタイミングずれた。

ふたたび吹っ飛ばされるハヤブサ。あいかわらず見極めが下手だ。

鹿はどのランクも攻撃は突進しかしてこない。

から数えると、それこそ何百匹も狩ってきた鹿なのに、ハヤブサは毎回吹っ飛んでいる。

「ハハハ、ハヤブサのへったくそ〜」ツバメのヤジが飛ぶ。

二匹目の鹿の首をはねたところであらためて様子をつかがつと、皆も二匹目をそれぞれ相手している。

他に鹿がないのを確認すると、私はハヤブサの方に向かった。

「まっつて〜！そいつに体術試してみる！！」

そう叫ぶと、返事を待たずにモーションを始動。ステップからの横蹴りを鹿の側面にあてる。

横に飛ばされ、体制を崩す鹿に踏みこんでからの蹴り上げを当てると鹿はあっさり昇天。

なんかこれってストレス発散にいいかも…

昨晚、訓練所のかかしで練習しておいたんだけど、実践でこつも上手くいくとは…ニへへ。

ニマニマしている私に、

「助かったよ、カスミ。どうも鹿は苦手だ……」

お礼をいうハヤブサ。

「あんたは戦闘そのものが苦手でしょ！」

突っ込むツバメ。

そうなのだ。情報収集にだけ、的確なアドバイスで街では頼りになるハヤブサも、こと、戦闘になるとたんにヘタレになっちゃうんだよね〜

「じゃあ、今度は皆で一斉に一匹づつ狩って、あとはカスミにスイ

ツチつてのでもいいかい？」

「そうっすね。湧く数は変わらなかったはずっすから。」

「自分も2匹までなら問題ないであります。」

「ほらっ、ハヤブーも不意打ちで一匹ならいけるわよね！？後はカスミちゃんに向かって逃げなさい！」

「ああ、情けないけどそうさせてもらっよ。カスミはいけるよな？」

「だいじょうぶだよ。やばかったら武器も使うし。」

「あっ、もう次のが湧いてるわよ。そういえばドロップはあったの？」

「そうだ、そっちの目的を忘れていた、どれどれ……」

「あっ、私、3つある！」 「私は2い〜」 「あたいは1だわ。」  
「俺も1っす。」 「自分は2であります。」 「俺、無いわ……」

「そっいや、ハヤブサってドロップ運も悪かったよなね……」

## 体術スキル（後書き）

前書きで戦闘と書いておきながらなんですが、ただの鹿狩りです。モンハンのガウシカを連想していただければわかりやすいかも。

あっ、ティガみたいなのを乱入させてもよかったですかな？

## クエスト 1

### クエスト 1

あれから12回、鹿の群れを倒したところで皮が100枚を越えた。

鹿相手なら体術だけっていうか蹴りだけでいけるようになった。突進してくる鹿に、「置いておく」かんじで横蹴り、これがきれいにカウンターできまる。

後退し、よろめく鹿に蹴り足を軸足にかえて回し蹴りで終わり。最後の方はひとりだけで全部を相手してみたが、楽勝だった。ちょっとしたものたりない。

なら、ちょっと早いけど昼食にと主街区に戻ることにした。

\*

\*

\*

「で、カスミ、昼からどこ行くんだい？」

「うーん、どっしようかな… 人型で試したいんだけどなあ。あと武器との連携もやってみたいかな。」

「あっ、その前にちょっといいですか、姉<sup>あね</sup>さん。」

「ん？ なんだい？」

「俺も体術スキル取りたいんで、別行動にしたいんっすけど…」

「自分も行きたいであります。」

「ああ、別にかまわないよ。でも急だねえ。」

「いや、あのカスミさんの動きこそ俺が求めていたモノなんっす！俺は『動けるデブ』を目指してたんっすけど、あの動きが加われれば『飛んで、蹴れる、デブ』になれるんっす！！！」

うん？ なんかよくわかんないけど、CG無しのアクションを実演ってこと？

「自分は武器防御と合わせることでいいかんじになる気がしたのであります！」

ああ、こっちはわかる。 防御から蹴りで体制崩しての追撃だね。 うん決まると格好よさそうだな。

「取る気なら場所教えるけど、あの試練つらいよ？ オウルはともかくスネークは苦労しそうだよ。」

「え、そうなんっすか？ あ、姉さん……」

「こらっ、なに弱気になってるんだい！取るって決めたんだろっ？なら四の五の言わずに行ってきな！！  
取れずに帰ってきたら承知しないよ！！！」

「あつ、それはだいじょうぶ。取れるまで帰れない仕様だから。」  
にこやかに告げると、二人はひきつった笑みを浮かべた。

「よし、俺が案内してくるから、三人はここで待っていてくれ。」

「いっよお〜。こっちはガールズトークに花咲かせてるから。」

「フォックスはいいの？フォックスならすぐ取れそうだけど？」

「ああ、あたいは武器三つでスロットいっぱいだかね。」

「それじゃ姉さん、行ってくるっす！」

「行ってくるであります！」

「「「がんばって〜！！」「」」

\* \* \*

戻ってきたハヤブサの提案で23層にきた。

戻ってきたら、行き先を決めず、ホントにガールズトークだけを  
していた私達にあきれながらも、  
ハヤブサはすぐお薦めスポットを提案してくれた。こういう時はホ

ント頼りになる。

私達が向かっているのは主街区から離れた小さな村。

各層に点在する村々には小さいけどNPCショップがあり、回復薬など消耗品の補給ができる。

その他にも村人NPCに話かけることでイベントクエストが発生することもある。

まあ、その為には昔のRPGみたいにしらみつぶしにNPCに話かけねばならないんだけど。

けど、レア装備が入手できたりするんで、面倒ながらも探すプレイヤーは多い。

私達が向かっている村にもそういうったクエストが存在している。

クエスト内容は単純で「近隣の洞窟にゴブリン共が住み着いたんで退治してくれ」ってもの。

村長の娘がさらわれたとかのオプションもなし。

洞窟そのものもシンプルで、畏無しの一本道。遭遇するMobもゴブリンのみ。

最奥部にはボスのゴブリンキングと取り巻きのホブゴブリン（ゴブリンの上位種）×5が待ち受けている。

気付かれると取り巻きが襲ってくるが、この時キングはまだ動かない。

それどころか、取り巻きがやられてもキングの一定範囲に近づかないかぎり微動だにしないんだって。

なのでじっくり回復してからでもだいじょうぶ。

その上、キングを倒せば帰りはMobが湧かないので、ヌルゲーすぎつと不評を買っている。

ただキングがドロップするライトアーマーセットの性能はいいので、コンプ狙いにとって容易さは歓迎されてるんだって。

私自身は初挑戦なので、ちょっとワクワクしている。

こういつのってダメはダメなりに話のネタになるじゃない？

でもハヤブサがこの場所にしたのは最新情報に基づいてのことだった。

あるパーティーが取り巻き殲滅後、余裕こいて弁当を食べていたら取り巻きが復活したんだって。

で、検証がなされた結果、

- ・ 5分立つと復活する。
- ・ 数の5匹は固定。
- ・ 復活するのに回数制限は無さそう。(100回まで確認済み)

ということが分かったんだ。って5分を100回って8時間すぎてるよ。ようやるわ。

レベリングによさげなんだけど情報が遅すぎたんだって。

今、トップギルドのレベルは40を越えているし、その下でも平均レベルは35。

それに対し、ゴブリン共はキングがLv25。取り巻きは24。雑魚は23。

結局、取り巻きをいくら倒しても経験値は入らないってわけ。

やっぱ残念クエは残念なままだったか。と笑われているんだけど…

今の私はLv30、充分おいしい相手だ。まあさすがにソロで5匹はきついだろうけどね。

他のメンバーもツバメがLv34、ハヤブサとフォックスがLv

33なのでOK。

ツバメとハヤブサは私が戻るまで30で止めとくつもりだったんだけど、生産職で上がったんだって。

フォックスはスタートが遅かったからで、スネークとオウルも同レベル。

「なら、みんなしてLv35になるまでここでもいいかも。」

「あの二人にも体術の訓練させなきゃだしねえ」

「ドロップの防具もいまだに強化して最前戦で使っている人も多いうて話よ〜。」

「そうだな、あれはぜひ、揃えたいな。」

こんなかんじでのんびりおしゃべりしながら村に向け歩いていった。

ふっふっふ、待ってるよゴブリン共、わが足（技）の前にひざまづくがいいー！

クエスト 1 (後書き)

## クエスト 2

### クエスト 2

クエストを受けて洞窟の前まで来た。

村から500mほどと近く、Mobも見当たらない。

「なんかっあっさりしすぎね。中もたいしたことないんでしょう？」

「油断は禁物だが、まあたいしたことはないだろう。」

「なんだい！気が抜けるようなことばかり言って！！薦めたのはあんたでしように！！？」

「いや、あんまりギリギリだと練習なんて言ってられないから……」

「ねえ、ともかく入ろうよ。やってみればわかるよ！」

「ああ、行こうカスミ、だらけたおじさん、おばさんはほっといて」

「こらっ、フォックスちゃん！おばさんとは聞き捨てられないわよ！！」

\* \* \*

中に入ってみたけど、やはりたいしたことなかった。

棍棒片手に襲ってくる雑魚ゴブリンの遅いこと。さっきの鹿の突進に比べたらほんとカメ。

ドタバタと走り寄る姿はまるでコントみたい。なんかハリセンで倒せそう……

まあ、さすがにハリセンは無理だろうけど、短剣の初期スキルデルタカット だけで倒せた。

このスキル、手首を切り上げ、首を水平にかき切り、袈裟がけに斬りおろすんだけど、私の武器だと……

まず手首を切断、次に首を跳ね飛ばし、最後に胴体を真っ二つ。

これ、血のエフェクトあったらグロいだろうな……

ここまで威力があるのは、短剣スキルのおかげだ。

攻撃力最低の短剣はスキルの手数が多い。さらにスキルでの攻撃は威力に1.5倍の補正がかかる。

さらに、急所を狙うようになってきているスキルはクリティカルが出やすい。

クリティカルならさらに50%威力が上乘せされる。

それでも片手剣の単発初期スキルと同等なのが普通なんだけど……

あと、この短剣の初期スキル、ダガーだと トライデント っていう三連突き。

ククリや鉈などはこの デルタカット、それでナイフ系は両方あるみたい。

でもナイフ系は使用回数で突き系か斬る系かに分かれるんだって。ハヤブサイわく、エクストラスキルが発動すれば両方使えるかも？と予想されているそうだ。

まあそれはいいとして、私の持つククリ、ディアハンターは作成者のカンシヨウさんから、

「攻撃力は片手剣と比べても遜色ない。」とお墨付きをいただいた一品だ。

それが、1.5倍だ、50%増しだとなればとんでもない威力になるのは当然だ。

他にも振り下ろし三連撃 トライアルチョッパー だと、ズバツ、ズバツと肩口から両腕を切断、そしてズブツと脳天から顎まで一気に刃が滑り込む。まあ中身がないから耐えられるけど、リアルに再現されたらリバーズ確定だねこれっ。

体術の方はと言えば、鹿狩りでも多様していた横蹴りなんだけど、ホーミング性能があると判明。

斜め後方からくるゴブリンに意識して発動させると、ステップの段階で自動的に軸足が方向調整。

あとはミサイルのごとく足が飛んでゆき、ゴブリンを吹っ飛ばす。

鹿よりも体重設定が軽いせいか、ホントに飛んでいくんだ、これがっ。

どこまで飛ぶか試してみたくなった。あつ、スネークとオウルがきたら競争しよう！

ただ、やっぱり手は出ない。殴るぐらいなら武器のほうがいいし、蹴りの使い勝手がよすぎ。

これもハヤブサが「足だけとか特化する方が強力なスキルが早く出るかも。」とのこと。

よしつ、私は蹴りのスペシャリストを目指す。そんなかんじのくのいちキャラがゲームであつたし。

そう、まだくのいちプレイもあきらめていないよ！ 気分は追われる抜け忍なんだから！！

\*

\*

\*

## 洞窟 最奥部

これまでは私とフォックスの二人がメインで戦ってきたけど（フォックスは武器を斧にしている）、ここはツバメとハヤブサも始めから参戦。でも取り巻きになっても動きはあいかわらずとろい。

まずはフォックスの範囲攻撃の横薙ぎで先制、すかさず私が一匹を蹴り飛ばし、4対4に持ち込む。

フォックスの先制攻撃に体制を崩しているところにそれぞれが得意スキルをお見舞いしている。

ツバメが七連続突き、フォックスは斬り上げ、斬り下ろしの二弾攻撃。ハヤブサは抜き銅かな？見えなかった。

私も水平斬りから始動して五芒星の形に斬り裂く　スタースラッシュ　で攻撃。

皆、二の矢はいらなかったみたい。

私に蹴り飛ばされた奴はフォックスが石突きでひるませてから真っ二つにした。

「で？これから5分も待つのか？　だっるいわねえ」

「ホントツ、食事とは言わないけど、お茶とお菓子は欲しいところねえ」

「俺はタバコが吸いたい。」

「私、スキルの練習してるね！」

やっぱり、ヌルかった。

それでも7回、湧いては瞬殺、湧いては瞬殺と繰り返してきたが、フォックスが切れた。

「だああ〜もう、こんな辛気臭いところで待つのはもういや！もうボ

スいくよー!!」

フィールドと違うジメツとした空気に嫌気がさしたみたい。正直私もだれていた。

私のために来てもらってるから言い出せなかったんだ……

「しょうがないな。じゃ次湧いたらそのままボスも倒そう。それでいいか？」

私に確認してくるハヤブサ。もちろん否やはありませんって。

話がきまったところでボスへのフォーメーションの確認。

ツバメ、フォックス、ハヤブサ、私とスイッチしながらの攻撃つてことに決まった。

取り巻きを瞬殺すると、そのままボスに向かってツバメが走る。おもむろに剣を抜くボス、けれど構える前にツバメのスキルが発動。

のけぞるボスに間髪いれずフォックスが斧の突進技で追撃。

フォックスの後ろを追走していたハヤブサの片手突きがつづく。

あのハヤブサの初撃の速さは充分見ていたので、私はハヤブサに並走、

ジャンプからの斬り下ろし、フォーリングクラッシュ がとどめとなった。

又ルい、又ルすぎる!!! 同レベルのフィールドMobより弱いんじゃない？

「まあゲームとしての適正レベルは23〜25だからなあ……」

ハヤブサが言い訳がましくつぶやいた。

そう言われると弱い者いじめしたみたいで気が引ける。（実際、  
そうなんだけど……）

「あつ、ドロップはなにが出た？……私んところは無しだね。」

雰囲気を変えるため、メニュー画面でドロップ確認。

「あつ、あたいんとこにきてる！……ゴブリンメール ってその  
ままのネーミングだねえ。」

フォックスが当たりだった。

「じゃ、ほい、ハヤブサ。」

躊躇なくトレード申請。

「え、いいのか？」

「私はフルプレート派。それにこんな趣味の悪い名前の装備はお断  
り。」

「じ、じゃ、遠慮なく」

欲しかった装備を軽く扱われ、ちよっとテンションが下がるハ  
ヤブサ。

「ハヤブー、せっかくだからすぐ装備してみてよ」

ニヤニヤしてツバメ。これはなにかたくらんでる顔だ……

畏とも知らず、素直に装備変更するハヤブサ。

変更エフェクトが消えて現れた装備は肩がトゲトゲのパンク風装  
備だった。

「ふう〜、きた〜世紀末覇者あ〜きたあああ〜!」

「ぷっ、ぷっぷふ、いっそ髪型もモヒカンにすべきだね、ぷっ  
ぷ」

うん、覇者っていうよりはその手下な感じ。こけおどし的な  
感じがひどい、ぷっくっく。

「ふ、ふん、女にはこの装備の良さはわからんさ!」

……厨二病……!?

## クエスト 2 (後書き)

クリティカルを5割増しとしましたが、どうでしょう？  
作者的には妥当かなと思うのですが…

それにしても技の名前を考えるのがきつい。

武器やMobの名前もそうなんですが…

なので本来は名前が出るような場面でも略称でごまかすことが多い  
あります。

とりあえず、階層の名前は諦めました。

### クエスト 3

クエスト 3

ゴブリンクエストに行った翌日、スネークとオウルが戻ってきた。

私みたいに一晩かかったのかと尋ねたら、夜中には終わったんだけど、そのまま寝ちゃったんだって。

オウルも日が落ちるまでには割れなかったんだって。あの岩ごんだけ。

私達の方は、あれからもう一度クエを受けた。私のレベルが31になったところでボスへ。

今度のドロップは小手だった。当然トゲトゲ。まだあと脛当てと兜があるらしい。

夜には裁縫スキルも練習した(チマチマ針を通していくだけの簡単なお仕事です)。レベルが上がるまで一生懸命頑張ったけど、ステータスを確認したらボーナスポイントはあるもののステータスの上昇が無かった。うーん、これはやめておこう。でも鹿皮は一応とつとこ...

今日は6人でゴブリン洞窟に向かった。

今回はスネークとオウルの練習なので雑魚は二人にまかせたんだけど、安心して見ていられた。

スネークは拳や体当たりも試していたんだけど、いまいちっすって言うてた。

「拳は軽すぎるし、体あたりは次の攻撃に繋げにくいっす。俺も足技主体にするっす！」

ということで、中華刀を突き刺したまま蹴り飛ばすといった戦法でさっさとかたずけていく。

オウルの方はSTRが高いので蹴りだけでもクリーンヒットが出ると倒せてた（カウンターで当たるせいなのか、いまんとこ100%クリーンヒット）。

「おもしろくないであります。連携ができないであります。」

と、本人は不満みたいだけど…

それとゴ布林飛ばし競争はやった。STRが高いオウルで決まりかなと思ってたけど、オウルの蹴りに耐えきれずゴ布林は空中で消滅、計測不能ってことで私の勝利。

スネークは角度を上げすぎたのか、ゴ布林は飛ばずにそのまま後ろに転がっていった。

皆が爆笑する中、恥ずかしかったのか、くやしかったのか転がるゴ布林を追いかけて蹴とばしていた。

取り巻きも私とスネークにオウルの三人だけでやってみた。

まず、オウルが前に出て一匹蹴っ飛ばす。そのまま別の奴の攻撃を受けつつ左脚で回し蹴り。

ひねった身体を戻すような右からの水平斬りで胴体を真っ二つ。

ワンテンポ遅らせて前に出た私とスネークに対し、私に二匹、スネークに一匹が向かってきた。

私は例によつて横蹴りで一匹を蹴り飛ばし、次の一匹に三連撃、蹴り上げ、斬り下ろしと繋げて倒した。

スネークもパターンと化した突き、蹴りのコンボの後、再度突きをいれて倒していた。

スネークが倒したのを確認したオウルは始めに蹴飛ばしたゴブリンをスネークに向けてまた蹴飛ばす。意図を察したスネークが飛んでくるゴブリンをオウルに蹴り返す。だがパスが届く前にゴブリンは消滅。

その間、私は最後のゴブリンを蹴りだけで倒してみた。蹴り上げの3発目で倒せた。

「カスミい、その倒し方はさすがに引くわ……」

フォックスにダメ出しされた。　テヘツ

で、次が湧くまで待機中。

「やっぱ、もっとスキルが欲しいっすね〜。かかと落としとか決めてみたいっす。」

「私は飛び蹴りがしたいなあ。あとサマーソルトキック!」

「いいっすね。ローリングソバットなんかもやりたいっすね〜」

「自分は今のままでも充分であります。両手剣だとそれ程には動けないであります。」

「ハヤブサはスキル上げないの？」

「うーん、正直、俺には体術は難しいよ。せつかく取ったんだけどなあ。」

「なによハヤブー、あきらめないで練習しなさいよ！」

「いや、練習以前にどつちで攻撃するか迷うんだよなあ。で、アタフタするから失敗するんだ…」

あちゃーそうなんだ。戦闘中は迷うつてのが一番危険だからねえ。

「ハツハツハ、そんだけはつきりヘタレを認められたら仕方ないわねえ、ツバメ。」

「ぶうー、いいよ！ーこちらは生産職に生きるから！ー！」

ぶつぶついいながら、持参のお茶を飲む。

昨日の反省(?)から今日はお茶とお菓子を持参。お菓子はそれぞれが一品ずつ用意した。

今、食べてるのはツバメが用意したシュークリーム。わざわざ25層まで行って用意したんだって。

まあ、そういう拘りはわからなくもないけどね。

「さて、そろそろ湧くんじゃないかい？退屈だから今度はあたいも参加させてもらうよ。」

「いいよ。サクツと終わらせちゃおう。次は私のクッキー出すね。」

「がんばってね。お姉さんたちは見てるから。」

ひとくくりにされたハヤブサも異存はないのか、コップを口から離さずにつなずく。

戦闘はホントにサクツと終わった。フォックスはメイスを使用。振り子の動きで4連撃。

ボカツじゃなくグシャツなかんじ。そして身体ごと回転させた大振りの一撃。これで眼前の相手は消滅、ついでに傍にいた一匹も巻き込んで吹っ飛ばす。

「うわっ！？あ、姉さん危ないっすよ！飛ばす方向考えてくださいっすよ。」

とどめを刺してたところに、すぐそばまで飛んできたゴブリンに驚くスネーク。文句を言いながらも、ゴブリンが立ち上がる前に頭を蹴って倒している。

「アハハハ、わりい、わりい。まあ勘弁しろや。」

私もオウルも一匹づつ倒して終了。再びティータイムへ。

「無限湧きって聞けば、おいしいと思うんですけど、実際やってみると5分は長いですねえ。」

「あまり効率よくないであります。」

今日が初挑戦の二人がぼやく。

今日はまだマシなんだよ。昨日はお茶とか無かったんだから。

「そうだね、せめて10匹は湧いてほしいもんだね。」

「私でもあんまり上がらないもんねえ、レベル。」

「うーん、レベリングはおまけとはいえ、もう少し使えると思ったんだがなあ……」

「じゃあ、ドロップ狙いに変更する？ 私はそれでもいいけどお。」

「それもどうでもいいかな。露店でも出回っているし……」

「レベリングにいい場所って他にないの？」

「今なら26層のオークかな？ 力は強いがゴブリン以上に遅い。的もでかいから大型武器のカモって話だ。ただよく湧く場所は人気スポット化していて順番待ちらしい。」

「おや？ もうかなりのプレイヤーが35、6に上がってるんだろ？ なのに順番待ちするほど人気なのかい？」

「下からくるのも増えているんだ。5、6人パーティーならレベル差が3くらいでも充分だからな。」

「ふーん、なら私でもいけそうだね。」

「カスミちゃんならだいじょうぶっしょお。フォックスちゃん達と

4人で行ってみるう？」

「そうだな。夜はすいているだろう。正式サービス組は夜狩りを嫌がるからな。」

私達は ん時が夜狩りばかりだったから、苦しめないんだけど、後発組はあまり夜狩りをしていない。

街中が真っ暗になるからよけいつらく感じるんだろうけど、実はフィールドはそれほどでもないんだよねえ。だいたいこの洞窟ん中くらいかな。なんか謎の照明があつて、薄暗いけどちゃんと見えるんだよ。

「じゃあ、次で終わりっすか？」

「ええ、まだみんなのお菓子食べてないよお」

「それこそ外で食べりゃいいだろ。なにもこんなとくに居座るこたあないさね。」

「それもそうね。ならさっさと終わらせましよう。」

立ちあがったツバメはティーセットをしまつと本日初となる武器を装備。

「よしっ、最後ぐらいは参加するかな。」

「フッフ、ハヤブサの出番はないよ。あたいがタコ殴りにしてしまいいっ。」

「俺も蹴って、蹴って、蹴りまくるっす！」

ふふ、私も負けないう。 あっ、スネークに合わせてダブルキックってのもいいかも……

和気合い合いとしゃべっていると、 の頃みたいで自然と笑みがこぼれた。

うん、これでいいんだね。ちゃんと楽しめている。

### クエスト 3 (後書き)

これで第1章は終了です。

第2章は戦闘シーン大増量でいきます。(でもまだピンチにはならない)

ただ、まだくのいちと呼べるようなことはできないかな。

依頼（前書き）

第2章です

## 依頼

依頼

「スイッチー!!」

叫びながらスネークは横蹴りで ワータイガー（人型の虎）を蹴り、距離を取る。

「まかせて!!」

受け答えた私はすでに虎獣人にむかつて愛用の デイアハンターに手をかけ走っていた。いまはまだあえて刀を抜いてない。（デイアハンターは短剣に分類されるんだけど、刀ってほうがしっくりくるんだ）そしてすり抜けざまに胴を斬りつける短剣突進スキル スクリーンアタック を発動。

このスキルは最近発現したスキルなんだ。腰の後ろに剣を隠す用に構え、溜めながらダッシュ。すり抜けざまに斬りつけるって技。私は デイアハンター を後ろ腰に水平に差しているから、抜刀する時の構えがスキル始動時の構えとほぼ同じになる。

ならば、とそのままスキルを発動させたら見事成功！でもみんなには驚かせたくて内緒にしていた。

「抜刀、カスミ斬り！」

私の技名（？）宣言と同時に虎獣人はポリゴンへと碎け消滅。うん、きまつた!!

「ハハハ、なによそれ。抜刀の意味あんのかい？ ハハ」

「Mobにフエイントかけても意味ないっすよ、カスミさん。」

「でもかつこ良かったであります。」

「ぶう〜、意味あるんです！わざわざ抜いて構えなくても技が出せるんだから！！」

「ハハハ、い、いやあんたその前まで抜いていたじゃないか。そりゃ、先制で使えばそうなんだろっけど、あんた技名言いたかったからってトドメン時まで使わなかったんじゃないのかい？」

「うっつ、凶星だ……初お披露目ん時のことをいろいろ考えてたんだけど……」

「くっ、『策士、策に溺れる』とはこのことか……」

「そんな、たいそうなもんかい、そういうのは『バカの考え、休むに似たり』ってえんだよ。」

もうやめて、私のライフはもう0よ！！

「まあまあ、姉<sup>あね</sup>さんもそのへんで…… 気持ちはわかるっすよ、カスミさん。」

「元氣出すであります。それで今の技は左手でもできるんでありますか？」

うん、スクリーンアタック・シャドウ ってちゃんとあるの。どちらか二択を迫ることで相手を攪乱するっていう対人用の要素が強い技見たい。ってばらしちゃだめじゃん。左の時の名前も考えてたのにい……グスンっ

「まあ、それはさておき、そろそろ戻るうかね？いま何時だい？」

「（夜の）10時まわってるっす。」

メニュー画面でドロップの確認をしていたスネークがすぐに答える。

「虎皮はいくつ貯まった？」

「38つす。」「36であります。」「42だね。」

私が39だから115枚か、うん

「依頼の100枚はクリアしてるし、いいんじゃない。おなか減ったし……」

「それじゃあ、戻るとするかい。いくよ、おまえら！」

「「へい……！」」

ホント、女ボスと手下だね。

\* \* \*

「しっかし、なんで夏だからってこども暑くするのかねえ？どうせプログラムなんだからさあ、もっと、こころ融通をきかしたってバチは当たらないだろうに……」

ゲートに向け歩いている間、フォックスはずっとぼやいていた。アインクラッドに四季があるのはわかっていたが、夏がきつちり暑いと文明の利器がないこの世界ではこんなにつらいとは予想外だった。

彼女の装備はフルプレートをやめ、最低部分だけを防御するビキニアーマー（胸の谷間がすごい、くっ）なんだけど、

「薄着をしても涼しくないってのがくやしじゃないか。なのに冬はちゃんと着てないと寒いってどういう理屈だい！！」

「それでも汗をかかないだけでも俺はずいぶん楽です。」

と、現実ではそうとうな汗っかきだったと思われるスネーク。彼も上は黒のタンクトップ、下はゆったりしたカンフーパンツといった軽装備だ。

「それに夜は涼しく、寝苦しくないのが助かるであります。」

こちらはTシャツに袖なしの鎖帷子を着たオウル。下はハーフパンツだ。頭の兜はなし。それどころか髪もない。つまりスキンヘッドだ。

「一度、やってみたかったんであります。」とオウル。

SAOで髪型は色も含め、ゲーム内で自由にカスタマイズできる。似合わなければ、すぐに戻せるので結構奇抜な髪形のアバターは多い。でもやせたオウルだとお坊さんみたいであまり迫力はない。

「それは言える。クーラーなしで普通に暑かったら寝れないよね。」

ちなみに私の格好は襟付きのチューブトップにミニスカート（スパッツは履いてるよ）。蹴りを多様するためロングブーツを履いているので、まるでどっかのコンパニオンみたい。

「なら、昼も涼しくなったっていいじゃないか！！こんな暑いのにアイスもないなんて！！！」

これが魔法も使えるゲームだったらできたかもしれないけど、SAOには魔法は存在しない。一応、井戸水で冷やしたという設定で冷たい飲み物や果物はあるんだけど、氷が無いのですぐぬるくなる。

「あつ、ちよつと待って。ツバメからメールが返ってきた。」

先程、「素材が集まったから戻るね」とメールしたんだ。

今日はツバメっていうか裁縫ギルドの依頼で虎皮を100枚集めて来ていたんだ。

ここは32層、最前戦が33層なので、まだ解放したばかりのエリア。

昼間は人が多いので日が落ちてからきているの。

最近、攻略のペースが落ちてきて、非攻略組もかなり追いついて

きた。

追いつき組の中にはこれを機に攻略組に食い込もうと張り切る派と、未発見クエストのコンプを目指す従来派とに分かれている。

今は張り切り派の方が多数みたい。それで、張り切り派でも既存の攻略ギルドに入隊を目指すか、新たなギルドとして参加するかで分かれるんだって。

私はもちろんクエスト攻略の方。前のギルドのゴタゴタで最前戦には出られないからね。その合間にツバメやハヤブサから素材調達の依頼も受けている。

二人は本格的に生産職を始めたので、戦闘用スキルのほとんどを外している。スキルは一度外すとそれまでの経験値がリセットされるので変更は厳しい。

もちろん二人は主要武器とアシストの二つは残している。レベル的にも自ら採取も充分可能んだけど、始めたのが遅いため、

「追いつくためには、狩りにいく暇が無い。」

ということなので私達が替わりに行ってあげている。

\*

\*

\*

「みんな、ツバメが先に33層に来てほしいって。」

「え〜、なんでえ〜？ 渡すのは明日でもいいでしょう？」

「うっん、それとは別件だって。食事奢るからって…」

「ふっん、なんだろう？ でも33層にいいレストランってあったっけ？」

「人が多すぎてあんまり行ってないもんねえ… まあツバメならだいたいしょうぶでしょう。」

「それもそうだね。でも急ぎの要件でなんだろうね？」

さて？ まあ、行ってみればわかるでしょう……

## 依頼（後書き）

スキルの取り外しに制約をつけてみました。ほんとは制約がないと思うのですが、生産職はスキルスロットを埋めているので強くないというキリトさんの発言があるので、泣く泣く制約をかけました。

ギルドメンバー（前書き）

新キャラ登場です

## ギルドメンバー

ギルドメンバー

「みんなゴメンねえ。疲れてるだろうけどちょっと話があつてえ。」

33層の裁縫ギルドの作業場ではツバメとハヤブサ、それと見知らぬ女性プレイヤーが待っていた。

「ううん、だいじょうぶだよ。それで話つて？あつ、先に虎皮渡しとく？」

「虎皮はいいや。みんな帰っちゃったから明日にしてくれる？話はレストランに行つてからにしよう。」

「ちよつとお、先に紹介くらいしてください。」

見知らぬプレイヤー氏が割つて入った。

「あつ、ごめんごめん。みんなこちらはリン。私達の同朋よ。」

「えつ、同朋つてことは……」

「ええ、私も元 風魔忍軍 のメンバーです。ツバメやハヤブサとは の時に会っています、あなた達とは、はじめましてですね。」

「そうなんですか。私はカスミです。はじめまして、リンさん。」

なんか、上品っていつかなんていつか、ギルメンらしくない？

「ちょっと待ってください。さんをつけてくださるなら『おリンさん』と呼んでください。」

……ああ、この人、間違いなくギルメンだわ……

\* \* \*

「それで話があるのはリンってことかい？ やっかいごとじゃあないんだろっね？」

フォックスはリンとそのまま呼ぶことにしてみた。ちなみにビキニアーマーは着替えている。  
オウルも鎖帷子は外して、私とスネークはそのまま。

「あくそんなたいした事じゃないのよ。要はパーティーのお願いっただけなんだから。」

「え？それだけ？それならツバメの紹介っただけでOKだよ。」

「ぶつちやけすぎですよ、ツバメ。確かに結論から言えばそうなりますが……」

「なにか事情がありますか？」

「いやいや、リンが言いたいのは特定のクエストのためにパーティを組みたいってことなんだ。」

「特定のクエストですか？」

「ええ。私から説明します。狙うクエストはここ3層、内容は討伐系の武器入手クエです。」

え、この層!? 最新情報じゃない? 難易度高いんじゃない?

「もうクリアしたパーティーは出てるのかい？」

「攻略ギルドがのきなみクリアしている。だから結構情報も集まっている。」

へえ、攻略組が狙うほどいい武器が出るんだ……でも短剣はないんだろっなあ。

「ほう、トップが狙うほどの武器なのかい? 種類は？」

あつ、フォックスもおんなじことが気になったみたい。

「種類は多いですよ。短剣、片手直剣、両手剣、メイス、片手曲刀、斧、それと棍スタッフです。」

えつ、短剣もあるの？

「7種類つすかあ。すっごいっすねえ。」

「それに最前戦の武器だから性能も折り紙つきだ。トップギルドは全員に支給できるよう、何回もトライしている。」

「はあ、それで攻略が滞ってるんだねえ。」

「それもあるが、そもそも停滞の原因は金欠らしい。26層から駆け足できたツケが貯まったんだろうな。装備のメンテにも困る事態になって金策に走りだした。で、停滞している間に追いついてきたプレイヤーがあらたに入会してくる。するとそうした新人の分も装備がある。ギルドによっては制服にしているところもあるから、ふところ事情はかなり苦しいそうだ。」

「へえ、そんな事情があったのか…にしてもハヤブサよく知っているわねえ。」

「ふん、まあトップ連中の事情はどうでもいいや。で、それは具体的にどんなクエなんだい？」

「いや、話ぶつたのフォックスだから……」

「まず、クエストを開始するには5人パーティーであるのが条件です。村に5人で訪れるとイベントが発生します。その内容は……」

\*

\*

\*

「つまり、ボスとは1vs1になるってことですよ？ きつくないですか？」

「いけると思いますわ。私はLv43ですし、みなさんもその辺だとツバメに聞いてますので。」

うん、私達4人はみなLv43になっている。レベル高めのクエストボスで頑張ったんだから。

「ボスのレベルは35。それなりの強さだが、取り巻きもないし、状態異常もなし。落ち着いてあたれば問題ないだろう。」

「それにみなさん用の転移アイテムはご用意させていただきますわ。ぜひ、ご協力ください。」

「それで、リンの目当ての武器はなんだい？ こっちとかぶるようなら2回行かないと、だね。」

「私の狙いは棍です。これまで棍が出るようなクエストは皆無でしたので、なんとしても……」

なるほどねえ。クエストはもちろん使っている人も見たこと無いわ。

「それならかぶらねえな。で、明日すぐ行くのかい？ 一緒には戦わないって言ったって、道中のこともあるし、一度、試しておきたいんだがねえ。」

「ええ、それでお願いいたします。恥ずかしながらパーティーの経験はほとんどないんです。」

それって、ギルドのごたごたのせい？

「それもありますが、はじめにアバターがリアル準拠になりましたでしょう。それで女性だというだけで寄ってくる方があまりに多くてちよつと怖くなりましたの。」

ああ、結構ネカマの方もいて、思った以上に女性は少ないって話だもんね。

「まあ、ソロの女性プレイヤーなんて希少種だかなあ。あたいにだってこいつらといっても声をかけてくるバカもいるし……」

「姉<sup>あね</sup>さんには迷惑かけてるっす……」

「自分らがもつといい見た目でありましたら……」

うなだれるふたり。

「バカおいでないよ！ あんなバカどもは誰だって声かけるんだよ。あたいらは仲間なんだ。気にすることはないんだよ!!」

うん、そう私達は仲間！ …でも私、声をかけられたことないんだよねえ……

## ギルドメンバー（後書き）

というわけで、王道の5vs5、対戦形式1vs1をやります。

あと、カスミが声をかけられなかったのは「なんちゃってくのいち」の格好があまりにひどく、イタイ子だと思われたからです。

## 実力

実力

「で、どこにする？虎いつとく？」

「うん、朝から虎は人いっぱいだしねえ。豹のほうがいいんじゃない？皮もまだ人気だし。」

33層ゲート前。朝おリンさんとは裁縫ギルドで待ち合わせ。先に昨日の虎皮を納品した。

ポーションも補充してこれからフィールドに出るんだけど、まだ行き先が決まらない。

フォックスがいう虎とはゆうべも狩ってた。ワータイガー、私がいふ豹とは31層にでる。ストライクパンサー。っていう人型の豹。ドロップする皮が文字通り豹柄なので女性に人気が高い。男性にも人気があつただけど、虎皮が出てからはそっちに人気が移ちやった。

「豹は早いからやりにくいんだよねえ。ちょっと面倒くさいけど、30層のハイオーク。なんかどうだい？あれの肉もそこそこのいい値がつくだろ。」

「そうね、豹だとフォックスとオウルは固まっちゃうもんねえ。個々の戦力把握が目的だし、豚は無駄に体力高いけど、まあいつか。おリンさんもそれでいいですか？」

「はい。それで結構ですよ。がんばりますのでよろしくお願いします。」

ペコリと頭を下げるおリンさん。

「」「こちらこそ（っす）、（）であります」「」「」

慌てて頭を下げ返す私、スネーク、オウル。

「リンはかたいねえ〜。もっとフレンドリーにしようやー!」

それ、男前っていうよりおっさんくさいよ、フォックス……

\* \* \*

フィールドに出る前にNPCからクエストを受注。

これは「ハイオークを100匹倒せ」っていう殲滅系といわれているクエスト。

もらえるのは経験値とコル。そんなに多くもらえるわけではないけど、オークではもう経験値が入らないので助かる。それにパーティーで分割じゃなく、個々に入るのでバカにできない。

ついでにハイオークの肉50個納品 や ハイオークの耳30個納品 っつのも受けておく。

肉は売った方が高いんだけど、経験値のほうが貴重だし、残りを売るだけでも悪くない稼ぎになる。

準備を整えいざ出発。最初に出くわしたのはオーク3匹。それぞれぶつとい棍棒を装備。

まずはフォックス、スネーク、オウルで相手することに。

スネークは得意の突進突きから横蹴りのコンボ。でもでかいオーク（身長2mは超えている）は吹っ飛ばない。スネークもわかつているので、ここは後ろに下がって距離をとる。相手の攻撃を誘い、余裕を持って空振りさせると、5連続の突きで反撃。スキルの終わりに蹴りでオークをひるますと、再度距離を置く。その後もかわしては剣スキルから蹴りの繰り返しでオークのHPを削り、最後はZの形に斬りつける3連続攻撃で倒した。

オウルは一度武器防御で防ぐと、蹴りでひるませV字に斬る2連撃を発動。これにひるむオークに蹴りで自分の硬直を補い再びV字斬り。またまたひるむオークに淡々と技を繰り返し、ハメ状態のままフィニッシュ。

フォックスはメイスを選択。足を止めての殴り合いを挑む。リーチがあるメイスだとオークと同じ間合いで勝負できる。硬直を嫌って通常攻撃で相手し、オークのスキル攻撃には武器防御で対応。何かは打たれたもののHPを半減させることもなく殴り合いを制した。

「シールドランスでチクチクするほうが無難なんだろうけど、辛気臭いっしねえ」

と、ポーションを飲みながらフォックス。

見てて怖いからやめてほしい……

「みなさん、お上手ですね。それにスネークとオウルも体術スキルは取得してらしたんですね。」

「あつ、私も持ってます。『も』ということはおリンさんも？」

「ええ。あれはギルドの悲願でしたから。棍とも相性がいいんですよ。次は私がお見せしますね。」

にこやかに笑うおリンさん。キリツとした切れ長の目なんだけど笑うとやわらかくなるんだ。

おリンさんは背がそこそこ高く（170cmくらいかな）黒髪をポニーテールにしている。

装備は黒のボディースーツっていうか競泳の全身スーツの半袖で、下は太ももに少しかかっている。

身体にフィットしたデザインが色っぽい。（体型はスレンダーな方だけど私よりは胸がある…）

「あつ、また3匹ですね。私ひとりで行きますので、みなさんはご覧になってください。」

軽やかに告げると、口調そのままにかろやかに近づいていく。

だが、攻撃に移るとその動きは予想のはるか上をいっていた。

まず、手前の一匹に飛び蹴りをお見舞いするや、着地と同時に横のオークを棍で突く。

さらに動きを止めることなくもう一匹のオークに後ろ回し蹴り。1mほどとはいえ後ろに飛ばされるオークに驚きの声上がる。まだおリンさんの動きは止まらない。左腋の下をくぐらせて後方に突きをくりだすと、最初に飛び蹴りを受けたオークが身体を反転させよ

うとしているところにヒット、さらに横蹴りで追撃。これにも吹っ飛ぶオーク。スネークじゃ飛ばなかったのに……  
蹴りの体勢を整えることなく、棍の先を掴んで、身体ごと回転。近寄るオークを2匹まとめて叩く。

手近のオークに回し蹴りを放つと棍で連続突き。7いや8回かな？目で追えない。

スキル終了と同時に後方宙返り。向かってくるオークの頭上を飛び越え、空中から脳天に突きを入れる。

着地と同時に無防備に後ろをさらすオークの頭に棍の水平打ちが小刻みに往復される。頭部への連続打撃に動きがおかしくなるオーク。そこに棍を真後ろに立てるように構えたまま飛びあがり、大きく弧を描いた棍を振り下ろした。打ちつけられたオークのHPはこれで消滅。着地するやいなや、まだ消えきっていないポリゴン片に突っ込み次のオークに飛び蹴り。カウンターでくらったオークはたまらず転倒。そこに地面を突くかのような連撃で追撃。はじくような口ーキックを合間に入れると今度は上からの叩きつけの連打。連打がおさまると確認もせずに戻り蹴り。きれいに後ろからきていたオークにあたる。その回転の勢いそのまま棍で追撃。

そして、先程見せた斜め下へ繰り出す突きの連撃がオークの足めがけて襲いかかる。部位ダメージがかかったのか、膝をつくオーク。その頭部に無情にも振り下ろされる棍がとどめとなった。ここではじめて足を止めるおリンさん。ふらふらとたちあがるオークのHPも残りわずか。狙いを定めるかのように左手を前に突き出し、右手を弓のように引き絞る。

「ハッ！！」

鋭い気合いの声と共に放たれた突きの一撃は見事頭部にクリーンヒット。砕け散るポリゴン片はいまの一撃が頭部を破壊したと見る者を錯覚させた。

「いかがでしたでしょうか？」

あっけにとられる私達に微笑みながら尋ねるおりんさん。

す、すすい、い、すすすぎるよ、おりんさん。

## 講義

### 講義講義

おリンさんを称賛で迎え、次の獲物オークを探す。

おリンさんに負けてられないとスネークと私とで倒してみたけど、やはりオークを飛ばせなかった。

「なにが違うのかなあ？ 単純にステータス？」

「比べてみます？」

と、あっさりメニュー画面を見せてくれた。普通、他人に見せるものじゃないのに……

「うーん、そんなにかわらないですねえ」 むしろ私の方がSTRは若干高かった。

「ステータスじゃないならスキルレベルかなあ？」

LV20で体術スキルを取ったおリンさんは私らよりも上だ。

「でも、スキルレベルが威力に影響するなんて話、聞いたことないっす。」

だよねえ。レベルあがると技が増えるっただけだもんね。

「傍から見ると早さが違って見えるんだが、関係ねえかな？」

「早さですか…、なるほど……」

ちょうどオークが3匹現れたので、

「試してみますので、フォックスとオウルで2匹を抑えてください。」

「あたいはいいけど、オウルは見なくていいのかい？」

「自分は威力に拘っていないであります。あくまでつなぎでありますから。」

「ならいつか。じゃあいつてくる。」

「いくであります!」

「では、私もやってみますね。まずは私の普段どおりに……」

とステップしての横蹴り。カウンターになってオークは2m飛んで尻もちをつく。

「次はちょっと意識を変えて……」

再び横蹴り。なんだけど、今度は蹴り足が見える。オークはよるめくものの飛ばなかった。

「やはり早さの違いですね。」ともう一度早い蹴りでオークを飛ばす。

停止状態からだったので今度は1mほどだったが確かに飛んだ。

「ふたりはAGIをいかせていないんです。」ドンツと蹴りながらおリンさん。

「自分の思い描く映像のさらに先を想定してみてください。」ドカッ

「目で追えない速度で動くことができるイメージしてください。」バキッ

「STRも大事ですがAGIも立派に攻撃参加しています。」グシユッ

「AGIは避けるだけではありません。早さイコール強さです。」ドグウン

私達に講義しながら蹴り続けるおリンさん。飛ばされてはせまり、せまっては蹴り飛ばされるを繰り返すオーク。見ててかわいそうになってきた……

「あとスキルを発動しなくともこの足には攻撃判定があります。」トンツ

フラフラよたよた近づくとオークに軽く足を前に出す。

その軽い、一撃とも呼べないような攻撃に崩れさるオーク。

うわゝ、またまた見せてくれるなあゝ ぐうゝかつこいいー！

「と、こんなところですか。あとはご自身で確かめてください。武器での攻撃も同じですよ。」

手数は気にしていたけど、技そのもののスピードかあ。

「いくら現実リアルな姿をとっていてもこの身体はしょせんつくりものです。ですからこんなことも簡単にできます。」

まっすぐ伸ばした足にペタンと上体をつける。　うわ〜やわらかい…って私もできるってこと？

「うおおおお〜、できるんっすね？このデブな身体でもできるんっすね!？」

うわっ、びっくりした。　なに、興奮してんのよ！

「はい、できます。イメージしにくいのであればお相撲取りを思い浮かべてください。あの巨体で又わりができます。宿で限界をつかみ、さらにその先を目指してみてください。すべての動きが違ってくるはずですよ。」

「」「はいっ(っす)！」「」

これができればくのいちにまた一歩近づける気がする……

\*

\*

\*

それからフォックスとオウルも交えてあらためておリンさんに講義をもらう。なんか最初の主旨から変わっちゃたけど気にしない。実演を混じえながらの講義に感心する一同。STR優先でもLV1からはAGIも増えているはず。ならLV1よりも早いスピードで技を繰り出せなければおかしい。なのに最初の時のイメージに縛られて、AGIが上乘せされていないといった話にしきりにうなずく。

そしてあとは実戦、ということでおークが固まっている場所へと移動。8匹のオークがうろつく場所で各々が技を試す。が、一朝一夕で身につくものではなかった。かえって考えすぎ危なくなる場面もあったが、そんな時はおリンさんがフォローしてくれた。それに安心して練習に集中するとだんだんよくなってきた。昼ちかくにはついにわずかとはいえオークを浮かすことができるようになった。

「討伐数も達したことですし、一度戻ってお昼にしましょう。」

「もうちょい練習してえな。メシ食ったらクエ受け直してもういっぺんやるっぜ。」

「やるっす。俺はまだオークを飛ばせてないっす!」

「え、そんな勝手な… あのおいですが、おリンさん？」 私  
もできればもうちょいしたいかな…

「フッフ、ええ、みんなが納得してから本番に挑みましょう。なんでしたら明日、明後日も練習でもいいですよ。」

「えっ、そんな、そこまで…おリンさんは早く本番に行きたいんですよね？それなのに……」

「いえいえ、こうしてパーティーメンバーさえ決まれば安心していられますから。いまのままでも問題ないんですが、1vs1ですから万全の態勢で挑まなければ。」

「よし、お言葉に甘えさせてもらおうじゃないか。この豚どもを一刀両断できるまでやるよ！」

いや、さすがに一刀両断は無理っしょ……

\* \* \*

「でも凄いですねえ。どうしてそこまで強くなれたんですか？」

「ホント、同じレベルとは思えないねえ」

「そうですねえ、やはりソロでやってきたのが大きいですかね。あの技を決めたのがきっかけでしたかしら？」

「あの技？なんですかその技って。」

「空中コンボですわ。ゴブリンを浮かせて、蹴りで3連コンボが決まった時は飛び跳ねて喜びました。」

うわっ、それぜひ見たい！！

「でもいまではそこまで浮くような軽いMobがいません。ゴブリンはすぐ死にますし分かりです。」

でも、いいなあ。私も一度は決めてみたい！よしっ、また目標ができた！

## 講義（後書き）

イメージ、イメージって言うてるとその内、心意に目覚めそうて怖  
いです。

## 圈内戦闘（前書き）

対戦前に特訓、これも王道ですよね。

## 圈内戦闘

### 圈内戦闘

昼からオークの殲滅クエを2回やり遂げた。

練習の甲斐あって、オークを飛ばす蹴りはできるようになった。

おリンさんは「これならできるんですけどね。」と浮かせたオークに棍で追撃を入れていた。

私も試してみたが、残念ながら私の短剣では届かなかった…

スネークも蹴飛ばせることができたし、オウルも連携がよりスムーズになった。

フォックスも一撃の威力が上がっている。でも本人は不満そうで、「せめて、3回で倒れろっつてんだろ」と斧を振り回している。

単発技4回でも私とは別ゲーなんだけど……

\* \* \*

クエ完了の報告に戻ってきたらいい時間なので夕食にした。

「食べ終わったら、またいく?」

「その前に対戦の練習をしておきませんか？」

「練習ってどうやってするんだい？」

「さいわい、私達の武器は5匹のボスに対応しています。なので圈内戦闘でかんじだけでも掴んでおけばかなり違ってくるでしょう。」

「え〜と、最初の蛇と蚣むかでは短剣と直剣。まあこれは前哨戦で全員で当たれるから置いて、5匹の獣人がボスよね。で、猪が斧、狼がメイス、山羊が曲刀、牛が両手剣で猿が棍でしたね。」

「誰がどれとあたるかも考えなきゃだね。」

「それぞれの武器と同じ相手ではダメでありますか？」

「ええ、私も始めはそれだと思っていましたんですけど、今日のこと考えが変りました。」

今日のこと？ なんのことかな？

「それはね、私達は案外自分の動きを把握していないってことなの。私もカスミの動きと自分の動きの違いにすぐ気付けなかったじゃない。」

おっ、そういうことかあ。確かに離れて見ていたフォックスが気付いたんだもんね。

「そっか、MMOと違って画面越しに操作してるわけじゃねえもんね。ならどつする？」

「それでね、考えていたんですけど、猪にはオウル、狼にはスネーク、山羊には私、牛にはフォックス、そして猿にはカスミでいこうと思うんですけど、どうかしら？」

「その組み合わせの根拠とか聞いてもいいですか？」

「まず自分と同じ武器の相手を外したってこと。で、次にスピードがありそうな猿には私かカスミだけど、猿は棍だからカスミに決まり。なら私は次に早そうな狼か山羊だけど、私が狼にいくと山羊はスネークになっちゃうわけ。でも山羊は曲刀だから私がいくとスネークも武器がかぶらない。あとは牛と猪だけど、牛が両手剣だからフォックス、オウルは猪つてことなんだけど……」

「おお、完璧じゃないっすか、ねえ姉さん<sup>あね</sup>」

「ああ、いいんじゃないかい。でもおまえが一番きつそうだよ。メイスだとリーチが違うからねえ。」

「そうねえ、あとカスミにも厳しいところを当ててるんです。棍は結構振り回しますから間合いに入りにくいんです。なのでカスミが厳しいようなら猿は私が相手します。」

えへ、やる前からそんなこといわれるなんて心外だなあ。よくし練習で驚かしてやるんだから。

「それじゃ、さっそく訓練所にいこうじゃないか。」

ま、まっつて、私まだ食べ終わってないよ。

\* \* \*

「では、私が棍でカスミを、フォックスがメイスでスネークを攻撃しますので、よけながら動きを覚えてください。」

「こっちからは手出しなしっすか？」

「ええ、まずは攻撃パターンやスキル発動の構えなどをしっかり覚えてください。」

「私達が使えないスキルを使ってくる可能性は？」

「ありません。トップギルドの報告で使われたスキルは判明していません。基本は300までの初級スキル。HPが残り1割で中級スキルを使ってくる。そのスキルも1種類のみということですよ。」

「その中級技ってのは？」

「どれも単発の大技です。溜めがあるので、受けるのもかわすのもたやすいでしょう。事実、トップギルドではその硬直に攻撃をすることで倒しているそうです。距離や武器にもよりますが、溜めの間に倒した例もあります。」

そっか、そのモーションが出れば逆にチャンスってわけね。

「それでは始めましょうか。フォックスさんも初級スキルのみでお願いします。」

「了解。ほらっ、構えな。ガンガンいくよ。」

「は、はい、お、おてやわらかにたのむっす。」

「では、カスミ、まずは3連続突きです。狙いは胴。いきますよ。」

「はい！」

\* \* \*

「ほら、そんな逃げ方では次の攻撃ができないでしょう！」

「ダメ！高く飛びすぎ！！ほら、空中で硬直がとけてるから着地の瞬間を狙われるんです。」

「よけたらからって油断しない！そこではまだ攻撃が届きます！！！」

散々だった……ううゝおリンさんもスパルタすぎい 私は褒めて伸びるタイプよ！

でも、こんなに早くて範囲の広い相手と戦ったことってないんだもん。仕方ないよね……



「単に人が増えすぎたからですよ。ソロの棍使いだと邪魔者扱いされましたので…」

あちゃ〜、地雷ふんじゃったかフォックス…

「まあ忍者の姿をしていましたから無理もないかと…」

って、そっちかい！ そうだ、この人も元ギルメンだったんだ…  
まあふざけてるって思われるのも仕方ないかな…って、いまの格好もそう変わってないし！！

「はああ〜、なんか疲れちまったねえ。宿に戻るとしようかい。あたいらはこの層で宿をとってるけどリンはどっする？」

「なら、私もご一緒しますわ。明日も朝9時でよろしいかしら？」

「ああ、それでいいよ。ふう〜ひとつ風呂あびたい気分なんだけどねえ〜」

あんまり言わないで、現実リアルが恋しくなるから……

でも、お風呂にアイスって即物的すぎない……

**圈内戦闘（後書き）**

次はクエストにいきます。

妖怪退治(前書き)

イベント&前哨戦

## 妖怪退治

### 妖怪退治

結局、訓練に4日を費やした。昼はオーク、夜は模擬戦と繰り返している内にレベルがひとつ上がった。

だが、レベル以上に意識変革による成長が著しかった。ホント目にもとまらぬ早業ってできるんだねえ。

けど、その分模擬戦がきつくなっていった。まあ私の相手はおりんさんだから最初から早かったんだけど、フォックス達がたいへんだった。特にフォックスに責められるスネークやオウルは見るのもつらかった（笑いをこらえるのが）。オウルなんかはフォックスを責める訓練もあるのに、気がつけば責められているといった具合で見てて苦しかった（笑いすぎて）。

まあ、二人とも訓練では力が入らないっていうか、フォックス相手がしづらいだけで、訓練の成果事態はだいじょうぶと自信たっぷりに話していた。

\*

\*

\*

「さて準備も整いましたようですし、そろそろ行きますか。」

いまは30層の宿の前。時刻は昼の1時。昨夜は最終チェックと

いうことで日付が変わるまで訓練したので、今日は遅くに待ち合わせという事になった。でも興奮して早くに起きた私はスキルの練習にと訓練所に向かったんだけど、オウルとスネークが先に来ていた。三人で笑いながらお互いのスキルをチェックしあって昼前に軽く昼食をとった。そして宿に戻って装備を整えていまにいたる。

みんなが揃ったのを見て、声をかけたおリンさんの装備は、競泳水着みたいな全身スーツなんだけど、上は手首まで、下も足首まで覆っている。素材もちよっと厚めなかんじ。そして中東風のベールが鼻から下を覆っている。どうみても雰囲気づくりとしか思えない……

「っていつてもクエスト開始は日暮れからなんだろう？早すぎないかい？」

こちらは昼まで熟睡していたと、フォックス。装備のビキニアーマーは変わらないけれど下に長袖の鎖帷子を着こんでいる。靴も補強入りのロングブーツ。

「ええ、そうなんだけど、村まではちよっとあるし、イベントを早めに発生させるといいことがあるの。」

「いいことありますか？」

オウルも長袖の鎖帷子を着用、その上にゴブリンアーマーフルセットで固めている。全身トゲトゲなんだけど、ひときわ目をひくのが兜。頭頂の大きな角を筆頭に後頭部まで一回りづつ小さなトゲが並び、両耳を覆う箇所からそれぞれ太いトゲが突きだしている。迫力はあるんだけど、なんだかなあ。

「フフフ、それは着いてからのお楽しみってことで。」

「ん〜、なんっすかねえ。余計にワクワクするっす。」

スネークは上にカンフースーツをはおり、袖をまくっている。服の下には肘当てと膝当てはつけているみたい。それより、その服って袖をまくっているのがデフォ？SAOの服って形状変えれなかったよね。

私は以前つくった革のワンピースを素材グレード上げて作り直してもらった。色は紺（豹柄じゃないよ）。黒にしたかったんだけど、ちよつと重かったんだよね〜。襟のデザインはロングネックに変更。あとライダースーツみたいに身体にフィットするようにしてもらった。小手とブーツも同じ革素材で新調（どちらも色は紺）。その下に黒メツシユの長袖シャツと同じく黒メツシユのレギンス（足首まであるやつね）を着用。このメツシユ、軽くてやわらかい金属をより合わせてできているんだ。だから軽いわりには布製より防御力があるっていう優れ物。なによりかっこいい！

みな普段の時よりも装備が増えている。なんといつてもこれから行くのは最前戦のクエスト。レベル的にはかなり余裕があるんだけど、つい慎重になってしまう。ソロでの戦闘ってのが拍車をかけるんだよね〜。うわっ、やばい、緊張してきた。トイレいきたい、っ  
ていけないんだよね〜SAOでは…

\*

\*

\*

村に着くまでMob（熊の獣人っていうか鎧着た熊）を倒しながら進んだ。

村に着くと入口のNPC（門番？）が騒ぎ出し、即イベント発生。村長のところに案内される。

「客人はそれぞれ武勇に優れた方々とお見受けする。そこで我らの危急を救ってはくださらぬか？」

なんか古めかしい口調で話し始める村長。内容を要約すると、裏山に現れた7匹の妖怪（っていう設定らしい。獣人だしね）が村で暴れ、生贄を要求。したがわなければ村を滅ぼすとのこと。そして今日、日が沈むと蛇と蚣むかでの妖怪が生贄を引き取りにくるから、まずそいつらを倒し、生贄に代わって妖怪のところに行き退治してくれって話。蛇と蚣むかでは生贄はいらないのかなと思ったら村で食べて帰る気らしい。あと、無事退治できれば村に伝わる武器をどうたらって言うてた。さらに武器もらえんの？でも使う人を選ぶなんてことも言ってるしどうだろう……

「引き受けましょう」とおリンさんが返事をする、

「おお、かたじけない。まだ日の入りまでは時間がある。ささいですが食事などいかがですか？」

ということので早めの夕食に。この食事、クエスト中限定だけどSTRとAGIがそれぞれ5も上がるんだって。おリンさんの言うてた『いいこと』ってこれかあ。

日が沈むと、すぐに蛇と蚣むかでが現れた。一応人間に化けているんだけど、蛇はのっぺりしていて鼻も穴だけ、舌をちろちろ出している。蚣むかでは八重歯が湾曲して飛び出していたので、「あれでどうやって食べるんだろう？」と変なことを考えてしまった。

NPCとの会話がなされ、ようやく私達の出番。蛇と蚣むかでそれぞれ武器をかまえる。

蛇の短剣は柄が電車の吊革みたいな形状で拳こぶしを握るようにつまみたい。刃渡り50cmくらいで刃がぐねぐねと蛇のように曲がっていた。

蚣むかでの直剣は両刃のどちらもがギザギザになっていて先のがつたのこぎりってかんじ。

蛇には私とおリンさん、蚣むかでにはフォックス達で戦うことは決めていたんだけど、蛇はおリンさんの棍をよけきれなく一方的に突かれ叩かれするうちに昇天。私の出番はなし。

蚣むかでもスネーク、オウルが一撃を食らわしフォックスがメールでポコボコにしていた。

でもやられた蛇と蚣むかでは煙に包まれるとそれぞれ蛇と蚣むかで本来の姿に変身。

原形をあらわしたなっ！てNPCが騒いでいるけど、だからなに？ってくらい弱かった。

蛇にかまれると毒になるみたいだったけど、またまたおリンさんの棍に手も足もでない。って元々手足無いんだけど…

このままじゃまた出番なしだとあせった私は飛び蹴りで参戦。でも蹴りとポリゴンが崩れるのが同時だったから私のは当たってない

? トホホ……

むかで  
蚣は麻痺なんだけど、こっちは唾みたいに飛ばしてくるからちよつとやっつかいっほそう。

でもシールドランスに持ち替えたフォックスがしっかりガード。横からスネークとオウルで斬りまくると

こちらもおっさり終了。ドロップはスネークと私がそれぞれGET  
(私何にもしてないけど…)

蛇の短剣は サイドワインダー っていうジャマダハルっていう武器なんだって。殴るように使うから体術スキルでも短剣スキルでも使えそう。後で試してみよう。

むかで  
蚣の直剣は ハンドレッドエッジ。百の刃先ね。納得。直剣ってうちらにはいないんだよね。売り決定かな。ネタ武器っぽいし…  
ってジャマダハルもか。

短剣 サイドワインダー 入手  
直剣 ハンドレッドエッジ 入手

## 妖怪退治（後書き）

次は1vs1です。

視点をかえてお送りします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1449ba/>

---

ソードアートオンライン くの一忍法伝

2012年1月10日12時50分発行